

真実の礎 11 話 まとめ

編集者まえがき

今回は以下の話を再編集した上で PDF ファイル化させて公開します。

第 25 話: いざゼーラへ前編、第 25.5 話: 『恐竜や』再建計画発動!、第 26 話: いざゼーラへ中間編、第 27 話: いざゼーラへ後編、第 27.5 話: 死神の影を踏みし者達(すべて著者は Neutralizer)です。

1

さてここで話の焦点を拳志郎達に戻す事にする、壬生国に向かった彼らは何をしていたのだろうか…

「くっ、着いたぜ壬生国に」

壬生国・静岡駅に着いた拳志郎、バット、リンの三人は駅の北口に出た。

「さて、連絡を入れておいたから迎えがくる筈だ。ここで待とう」

「そうね」

三人は迎えが来るのを待っていると彼らの近くからギターをかき鳴らす音と歌声が聞こえてきた。バットが音のする方向を向くと一人の若者がギターを弾きながら歌を歌っていた。

「♪お前が～風になるな～ら～果てしない～空になりた～い～」

(へえ、いい歌だな。それに結構うまいじゃん)

若者の歌に感激したバットは何気なしにその若者に近づき、財布から千円札を出すと開いているギターケースの中に入れて歌に聞きほれていた。が、

「おいお前!!」

と若者は急に歌うのをやめ、バットに怒鳴りつけた。バットは驚いて怯む。

「な、何だよ」

「何だよじゃねえ!! 何だ、この金は!!」

「そ、そりゃあお前がいい歌うたってんなと思って…」

「ふざけんな!! 俺は金が欲しくて歌ってんじゃねえんだぞ!! 俺を馬鹿にしてんのか!？」

「な、何だと!? 人が親切でやっているのにそういう態度で返しやがって!」

とバットも顔色を変えて怒り出した時、後ろから彼の肩に手をかけられる。

「!ケ、ケン!」

彼が驚いて振り向くと拳志郎が立っていた。

「やめろ、バット」

「しかしケン、こいつは」

「まあ待て。そこの君、すまなかったな。彼も悪気があってこうしたわけではないんだ。俺が代わりに謝るから許してやってくれないか」

と拳志郎は若者に頭を下げる。

「おい、ケン!」

「いいからバット、お前も謝れ。どう見てもお前に非がある」

「…分かったよ、悪かったな」

バットもしぶしぶ拳志郎に従って若者に謝る。さすがに彼も黙っていたが

「…もういいよ、二人して頭下げられたらこっちも許さない訳にはいかねえよ。これは返すぜ。他の所で歌いなおすか」

と千円札を返すところかへと去っていった。

「なあ、ケン」

「バット、親切も大事だがただやればいいというものではない。そういうのを恩着せがましいというのだ」

「だけど…」

「バット、ケンの言う通りよ。観念しなさい」

とリンにもたしなめられ

「ちえっ、気分がそがれちまったよ」

とバットは苦虫を噛み潰したような態度で言い捨てた。その時、

「迎えがきたようだな」

と拳志郎が言った先から一台の車が来た。

「やあ、来たな拳志郎。迎えにきたぞ」

「トキ…義兄さん」

車から降りてきたのはトキだった。拳志郎は彼を尊敬しているので彼を兄として慕っている。

「お久しぶりです、トキさん」

「リンちゃんか、久しぶりだな。バット、どうした? 何か機嫌が悪いようだが」

「何でもないよ、ただちょっと嫌な事があってさ」

「バット!」

「ハハハ、まあいい。では行こうか、我が兄ラオウの元へ。彼が首を長くて待っている」

とトキはそういうながら彼が乗ってきた車に三人を乗せるとラオウのいる黒王邸へ向かった。この時三人は知る由もなかった、駅前で歌を歌い、金を渡したバットに怒鳴りつけた若者が、あの世界的に有名なロックバンド『FIREBOMBER』のメインボーカルである熱気バサラであった事を…。

一方、黒王邸では…

ラオウが兄のカイオウ、部下のリュウオーンと共に今まで対立してきた朽木白哉、彼に属している更木剣八と日番谷冬獅郎と現在の状況について話し合っていた。

「…そういうわけであの『公平透明党』の票が確実に増えていく事は確かだな。聞いたところによればあのハヤタも連中に資金を提供したそうだ」

「そうか…。もはや奴の当選は確実となるか…」

「何だラオウ、テメエも随分弱気になったもんだなあ。まあ、テメエの体がそんなんじゃ無理もねえか」

「何!? 更木!! 貴様あ～」

更木の悪態にリュウオーンが反応し顔色を変えて怒り出すが

「やめい!! リュウオーン!! うぬを何の為に白哉に使いとして出したと思っているのだ! うぬはガキの使いで話し合いに行ったのか!？」

とカイオウが彼を叱り付ける。

「も、申し訳ありません!! カイオウ様…」

「ちっ!何だよ、面白くもねえ。喧嘩なら相手になってやったのによ」
と更木がまた悪態をつく
「やめとけ。今はそんな戯事をやってる場合じゃない事ぐらい分かってるだろうが」
と日番谷が嗜める。
「へいへい、わーったよ…」
「フッフ…更木、このラオウの死に様が見たいか?だがそれを見るのは高くつくぞ」
とラオウが言うと
「へっ、言ってくれるじゃねえか。まさか俺を道連れにしようってんじゃねえだろうな?」
と更木が返す。
「フッ、冗談を…うぬの命よりもっと高くつくとだけ言っておこう」
「おうおうそりや怖えなあ、ラオウさんよ」
二人の冗談のやりとりを聞いてリュウオーンが憤慨しようとするがカイオウの鋭い視線を見て慌てて引込める。
「さて冗談はそのくらいにして、奴等の話に戻ろう。『魔の庵』の一件については知ってるな?」
と白哉が話を戻すと
「ああ、俺も独自のルートで調べてみたが奴等め、防衛信用組合まで乗っ取る気だ。しかも壬生放送まで買収し、選挙戦を圧倒的優位に立つつもりだ」
「まずいな、王室も同様に奴等に警戒を抱いている。奴等は親米派だからな、アメリカ一色に染める事は間違いない」
「だが奴等は曲がりなりにも合法的にこの国を乗っ取ろうとしておる。こればかりは止められぬ」
「対策はあるのか?」
「うむ、実は我が弟が来る」
「弟…、トキか?」
「いや、かつて弟同然であった男よ」
「霞拳志郎か!?!」
「そうだ、あの男は薬害疑惑を追っている事は知っておろう。その疑惑は今回の事にも深く繋がっている」
「ああ、知ってるぜ。CP9とかいうクソ製薬会社の事だろう、奴らもあのニタリ顔男に資金提供してるそうじゃねえか」
「そうだ、その繋がりの仕組みを暴く事さえできれば奴は支持を失う事となる」
「だが時間は掛かるぞ」
「心配するな、実は兄者がある男と共に組織したチームがいる。今その者達にも奴等の事を調べさせておる」
「分かった、ならばこの俺も防衛省に戻り対策を練るとしよう。場合によっては国王にも報告しておかねばならん」
「そうしてくれ、ところで頼みがあるのだが」
「何だ?」
「実はこのリュウオーンをお前の指揮下に置いて欲しい」
「な!?何故ですか?ラオウ様!」
突然の事にリュウオーンは戸惑う。
「リュウオーンよ、このラオウは兄者と共に影の面で奴等と戦う事に決めた。知ってる通り、我が命が尽くのは時間の問題だ。それ故うぬは朽木の指揮下に入り、俺と朽木との連絡役と同時に壬生国の将来を担って欲しいのだ」
「で、ですがラオウ様…私は…」
「うぬはこのラオウと兄者に対し忠実に働いてくれた。だがもう派閥争いは終わりにせねばならぬ、その為にはうぬが彼の指揮下に入り、我が派と朽木派を一つにまとめてもらいたい。よいな、これは命令だ、もし従わぬならば我が元に戻ってくる事は二度とないと思え。朽木の指示を我が指示と思い壬生国を守れ」
この一言にリュウオーンは
「はい、分かりました。ではただ今をもってこのリュウオーン、朽木白哉の指揮下に入ります」
と彼の命令に従う事にした。
「うむ、頼むぞ」
「俺からも頼む」
「まあ、そういう事だ。せいぜい仲良くやろうぜ」
「更木、歓迎しているようには聞こえんが」
その時、ラオウの部屋の内線が鳴り、彼は受話器を手にする。
「何だ?」
『リュウガでございます。たった今、トキ様と拳志郎様ご一行がお着きになりました』
「おお、来たか。ならば我が部屋まで通せ」
『はい、かしこまりました』
彼は受話器を置く。尚、リュウガはラオウの執事であり、黙々と仕事をこなすのでラオウは特に彼を信頼している。
「では我々は失礼するか、更木、日番谷、行くぞ」
と白哉が部屋を出て行こうとすると
「まあ待て、一応顔だけでも覚えておいてくれ。それからでも遅くはないだろう」
とラオウは彼等を引き止める。
「いいだろう、協力者の顔ぐらい知っておかねばな」
白哉達はもう少し留まる事にした。

トントン
「入れ」
ガチャ
「失礼致します。ご一行をお連れ致しました」
「うむ、入ってくれ」
「では私はこれで」
リュウガが去るのと入れ替わりに拳志郎達が入ってきた。
「よく来てくれた、拳志郎」
「ラオウ…やつれたな」
「フッフ、見ての通りだ。日に日に癌が我が体を蝕んでいく、これでよくぞ十年も保ったものだ和我ながら驚いているがな。だがそれも後どの位かは

分からぬがな、フッフ…」

「えーい、しっかりせい!それでもうぬはかつて天を掴もうとして野望を抱いたこのカイオウの弟か!!」

弟の弱気な発言に見かねたカイオウが一喝する。

「フッフ、兄者らしい。だがこの俺の命が尽きるのは避けられぬ。それまでにはこの国の行く末を変えねばならぬ」

「ああ、その為に俺達は来た。早速だが…」

「分かっておる、そこの二人に対しての協力は惜しまん、機密事項以外は存分に取材するがいい。宿泊はこの邸宅の開いている部屋を使え、後でリュウガに伝えておく」

「すまん、恩に着る」

「フッフ、俺とうぬは修行時代からの仲ではないか。尤も一時期は対立していた事もあったがな」

ラオウ、カイオウ、トキの三兄弟と拳志郎、ヒョウの兄弟は拳志郎の実父リュウケンの下で拳法修行に明け暮れた間柄だった。無論、その中にはジャギもいた事は言うまでもない。

「そうだ拳志郎よ、紹介しておこう。そこにいるのが現防衛大臣の」

「朽木白哉という、よろしく頼む」

「霞拳志郎です」

拳志郎と白哉は目礼を交わす。

「貴公の五車星出版社にはかつて世話になった、この場を借りて礼を言わせてもらう」

「いや何、あれはジュウザが主に活躍しただけの事。礼ならばジュウザが受けるべきです」

「なるほど、誠実なわけだ。ラオウが呼び寄せる事だけあるな、信頼できる」

「恐れ入ります」

「いや何、こちらこそ協力してもらう立場だからな。では我々はこれで失礼する、行くぞ」

と白哉は更木、日番谷を伴って部屋を出て行った。その時

「父さん」

と入れ替わりに一人の男の子が部屋に入ってくる、それに続き

「リュウ!だめですよ!お父様は今仕事の話をしているのですから」

とラオウの愛人であるトウが入ってきた。

「あ、拳志郎のおじさん」

「やあリュウ、大きくなったな」

拳志郎はにこやかに男の子に話しかける、この男の子の名はリュウ、ラオウがトウとの間に得た息子である。

「おおリュウ、どうした?この父者と遊びたいのか?」

「え?遊んでくれるの!?!」

「リュウ、いけません!申し訳ありませんラオウ様…」

とトウはリュウを叱りながらラオウに詫げる。

「よい、このところリュウと遊ぶ時もなかったのだな」

「しかし…」

「リュウ、どうだね?私と外でキャッチボールでもしないか?」

とトキがリュウを誘う。

「ホント?」

「ああ、いいとも。さあボールとグローブを持って来なさい」

「やった一つ!じゃ今すぐに持って来るね」

とリュウは喜んで部屋を出て行く。

「すみません、トキ様」

「いいんだよ、トウ。私なら構わないさ、それに拳志郎と積もる話があるんだらう、兄さん」

「トキ…すまん」

「なあケン、俺達もあの子に付き合っただけでもいいか?」

「ああ、かまわないさ」

「そんじゃ決まりだな。リン、俺達もあの子の所に行こうか」

「ええ」

こうしてトキ、バット、リンも部屋から出て行き、

「それではラオウ様、私も…」

とトウも部屋から出ようとする

「待てトウ、お前はここに残れ。お前の事についても話があるのだ」

とラオウは引き止めた。

「…さて拳志郎」

「…何だ?」

「うぬには頼んでおきたい事がある」

「言ってくれ」

「まずはここにいるトウの事だ…」

「…ラオウ様」

「この俺の死後、トウをリハクの元に帰してやって欲しい」

「ラオウ様!私は…」

「分かっておる、これは俺が死んだ後の事を拳志郎に頼んでおるのだ」

「…分かった、引き受けよう」

「それとリュウだが…」

「ああ、俺が後見人になる。トウの元に置きながらという事でかまわんか?」

「そうしてくれ。これで一つ懸念はなくなった、全力を挙げて国の事に対処できる」

ラオウはここで一度、話を切ると

「ところで拳志郎、うぬはジャギの行方を知らんか?」

と話題を変える。

「いや、知らん」

「そうか…ユリアが亡くなる前のあの相続の日に飛び出して行ったきり、音沙汰なしだからな」
ラオウはそう言って黙り込む。彼も彼の兄弟もまた拳志郎の父リュウケンで修行した。そのリュウケンが死んだ後、遺産相続が行われたのがラオウ・カイオウ・トキの三人はリュウケンと養子縁組を交わしていた為、遺産の相続権があった。しかし三人は『自分達は元々血は繋がっていない、それに自分達の力で将来を切り開きたいから』と遺産の相続を放棄した。ジャギもリュウケンと養子縁組を交わしていたのだが遺産相続の内容に不満を持ち、飛び出していったのだった。

「フン!あの愚か者め、何の為に我らが師リュウケンがあ奴の為に土地をやろうとしていたのか…。その意味を知ろうしないどころか異議を唱えおって!」

カイオウが吐き捨てるように言う。ジャギにはリュウケンが所有していた土地の一部を与えられる事になっていたが彼は道場の継承権を欲しがっていた為、愕然となると同時に道場を継いだ拳志郎に嫉妬の念を抱いたのだった。

「拳志郎」

ラオウは徐に口を開く。

「何だ?」

「うぬは実家に戻るのか?」

「ああ、墓参りをするついでにな」

「そうか、ヒョウもうぬに会いたがっている。それを済ませて…」

「オーブ、神戸、九州を回ってゼーラにのり込む」

「そうか、うぬが追っているあの件か…」

「そういう事だ…」

二人は黙り込み窓から外でリュウと遊んでいるトキ達を見ていた。

「やあ、帰って来たな拳志郎」

「戻ったよ、兄さん」

拳志郎は山の麓にある実家に帰り、実兄のヒョウに会っていた。無論、リンとバットも一緒である。

「相変わらずのようだな」

「兄さんこそ」

「道場の方は?」

「フッ、気になるか?お前はジャーナリストの道を歩むと決めてから俺に代理を頼んだのだからな」

「ああ、兄さんにはすまないと思っている」

「いいさ、お前が決めた事だ。まあ覗きだけ覗いていけ、それから行くんだろ?墓参りに」

「ああ」

四人は連れ立って実家の隣にある道場に向かった。

「ハッ!!」

「トリアア!!」

威勢のいい声が道場に響き渡っている。門下生達が修行の真っ最中であった。

「そこお!!突きがなってないぞ!!」

「はい!!」

門下生達に厳しく指導している肌の黒い男がいる。彼の名は黑夜叉、代々霞家に仕えてきた従者の家系の末裔であり彼もまたヒョウの執事と成って仕えている。

「おお、これはヒョウ様。何と拳志郎様もお帰りでございましたか」

黑夜叉は四人に気がついて彼らの元に歩み寄る。

「やっているな、黑夜叉」

「ご無沙汰しております、拳志郎様。お帰りとあらば私自らもお迎えに上がりましたものを」

「何、かまわないさ。指導の邪魔だったかな」

「とんでもございません。是非、門下生達の様子をご覧になって下さいませ」

「ではそうさせてもらおうか」

「へえ、結構いるなあ。門下生が」

バットが道場に上がりながら感心した趣きで言う。一方、ヒョウは

「拳志郎、お前から見て特に実力がついていそうな奴はいるか?」

と門下生達に指を差しながら拳志郎に尋ねる。

「そうだな…」

拳志郎が彼らに目をやると一人の長い黒髪の女性に目が行く。

「兄さん、あの女性は?かなり様になっているようだが」

「フッ、さすがだ。目のつけどころがいいな、ティファの実力を見抜くとは」

するとリンが

「ティファ?あの国連事務総長の?」

と少し驚く。

「ハハハ、残念ながら違う。彼女の名字はロックハートだ。どうだ拳志郎、彼女と一手手合わせしてみるか?」

とヒョウが誘うと

「面白いな、久々にやってみるか」

と拳志郎も乗り気になる。

「ほう、久しぶりに見ますな。拳志郎様の格闘術」

「黑夜叉、準備してくれ」

「畏まりました」

黑夜叉はそう言う

「よーし、それまで!!これより、当師範直々に組み手を行うので真ん中を開けよ!!」

と門下生達に指示する。

「押忍!!」

と門下生達は叫ぶと全員壁側に行き、壁を背にして正座した。

「これより組み手を行う、が相手は私ではない。ここにいる我が弟、拳志郎が相手をする。ティファ!前に出よ!!」

とヒョウが先ほどの女性を指名する。
「押忍!!」
と指名された彼女が中央に出てくる。一方の拳志郎もジャケットを脱いでリンに渡すとティファの前に立った。
「よろしくお願いします!」
「こちらこそ」
二人は礼をすると構えた。
「始めい!!」
ヒョウは叫ぶ。しばらくの間、二人は全く微動だにしない。
「な…何か物凄く張り詰めているな、空気が…喉、乾きそうだ」
とバットが唾を飲み込みながら呟く。
「フツ、それが分かるなら君にも素質はありそうだな」
とヒョウ。その間も拳志郎とティファは動かない。
「へ、ヘックション!」
と門下生の一人がくしゃみをした途端、二人は動く。
「ハッ!」
ティファが下段回し蹴りを仕掛けるが拳志郎はいとも簡単にかわし、右からパンチを繰り出す。彼女は右腕でそれを流し、下から左アッパーを繰り出す。拳志郎は顎を上げてかわし、右から蹴り上げようとし、ティファは蹴りが向かう方向へかわす。そんな攻防が五分ほど続いた。
「彼女、やるわねえ」
とリンが感心するが
「いや、拳志郎様はまだ本気を出してらっしゃらない。あの方が本気を出せば彼女なぞ一撃で倒しておられる」
と黒夜叉が言う。
「え!?ケン、あれでまだ本気じゃねえのかよ」
とバットが驚く。
「そうだ、何せあのラオウ、カイオウとで互角に渡り合えるほどの実力であらせられるからな」
「なあ、ヒョウさんとでも互角なのか?」
とバットがヒョウに尋ねると
「フツ、俺では弟には敵わないさ。我が父であり師でもあるリュウケンがこの道場の後継者に指名したほどだからな」
と彼は答える。その間も攻防は続いていた。
「ホオーツ!アッターツ!」
拳志郎は雄たけびをあげるとともにティファの顔面に拳を素早く繰り出すと彼女の顔面擦れ擦れで止めた。
「そこまで!!」
とヒョウは止めると二人は互いに離れた。ティファの顔には汗が流れていたが拳志郎の顔には汗が一滴も流れていなかった。二人は礼をして下
がるとヒョウがティファに近づく。
「どうだ、彼と戦ってみて」
と彼が尋ねると
「私はまだまだですね、全ての技を簡単にかわして間をおかずに技を繰り出してきましたから。かわすのが精一杯でした、さすが師範の弟ですね」
と彼女は答えた。

道場を出た拳志郎、リン、バット、ヒョウの四人とヒョウの妻であるサヤカは霞家代々の墓へ向かう。墓のある場所に向かって緩やかな坂を上りながら拳志郎はサヤカを気遣う。
「義姉さん、いいのか?その体で」
「ええ、大丈夫よ。このぐらゐの坂だったら平気」
と彼女は答える。彼女は妊娠しているのだ。
「今、何ヶ月なんだ?」
「六ヶ月よ、元気な子よ、よく動き回るのよ」
「そうか、丈夫な子が生まれるといいな」
「ありがとう、拳志郎」
やがて一行は墓前に着く。拳志郎は兄と二人で花を取替え、線香をあげて合掌する。他の三人も同様に合掌する。
「ところで拳志郎、お前はジャギの行方を知らないか?」
とヒョウもラオウと同じ事を尋ねる。
「いや…。ラオウにも同じ事を訊かれた」
「そうか…。一体どこで何をやっているのやら…。アイツが出て行った後…。いや、その先はやめておこう」
「いいんだ、兄さん。ユリアは幸せな人生を送れたと今でも思っている」
「相変わらずだな、お前は。だからこそユリアにはお前が相応しかったと思っているよ」
そう言いながらヒョウは弟に笑顔を向ける。拳志郎も彼に笑顔で返した。その日、実家に泊まった拳志郎はリンとバットに壬生国での取材を託し、次の目的地へと向かった。

同じ頃…。
「ヘーックション!!」
ジャギがくしゃみをしていた。
「どうしたんですかい?兄貴。風邪ですか?」
「うっせえ…。拳志郎の野郎だな、俺の噂をしてるのは」
とジャギが呟く。
「え?何か言いました?」
「何でもねえよ!それよりも竹内、あの野郎はどうだ?」
「へへっ、あいつにはちよいと嗅がせてますぜ。金と共にアレも」
「そうかそうか、編集長からは何か言ってきたか?」
「そうですね、何でも例の出版社が動いたとの情報が入ってますが」
「となると奴め、ゼーラに向かうつもりだな、まあいい。拳志郎、 temeエへの復讐はじわじわとやらせてもらうからな。大事なものを少しずつ奪って
いってやる、その分、苦しみもじわじわと与えてやるがな、クッククック…」

拳志郎への歪んだ恨みを込めながらジャギは不敵に笑った…。

2

「あ、拳志郎さんだ!」

一人の子供が拳志郎に気づいて駆け寄ってくる。拳志郎は今、オーブの南斗園に来ていた。

「やあ、こんにちは」

拳志郎は駆け寄ってきた子供に声を掛ける、すると

「拳志郎さ〜ん!」

と数人の子供達がつられて彼に駆け寄ってくる。彼は子供達には顔がよく知られている、園長のフドウやこの職員とは入魂の仲だからだ。

「ケン!」

「ケンさん!」

子供達に続いて二人の女性が彼に近づいてくる、二人の名はマミヤとアイリ、共にこの南斗園でフドウと共に孤児達の世話をしている。

「久しぶりだな、二人とも」

拳志郎は二人に笑顔を見せる。

「ケンこそ、いつオーブへ来たの?」

「一時間前だ」

「ケンさん、ここへ来たという事は…」

「ああ、今日は…」

と拳志郎が何か言おうとした時、

ドスンドスン

と地響きのような音を立てて園長のフドウが子供の一人にズボンの裾を引っ張られながら彼らの元に来た。

「ほら、父さん早く早く」

「ハハハ、こらこら慌てなくても分かっているさ。おお、拳志郎さんご無沙汰してます」

「フドウも相変わらずだな」

「貴方でもです、ここへ来たとは知りませんでしたよ。連絡ぐらい寄越してくればよかったものを」

「すまない、用事を済ませたら次の所に行く予定だったのな」

「というと、例の…」

「ああ、乗り込む。それに…」

と二人が話していると

「あ、ラクス様だ!」

「ホントだ、ラクス様だ、ラクス様だ」

と子供達が騒ぐ。彼らの視線の先には南斗園の正門前に止まったリムジンがあった。そしてそのリムジンからは彼らが言っていた通りオーブ王妃であるラクスが現れ、彼らに向かって歩いてくる。

「ラクス様〜!」

子供達の何人かは彼女に駆け寄る。

「あら皆さん、こんにちは。本当に元気ですね」

とラクスは微笑んで子供達に挨拶しながら拳志郎達へ近づいてきた。拳志郎は彼女に向かい深々とお辞儀をした。

「霞拳志郎さんですね」

「お初にお目にかかります、王妃様」

「挨拶はそのぐらいいして顔を上げてください。貴方のところで出版している『週刊北斗』、我が王室でも読ませていただいております。ご指摘が鋭いと評判ですわ」

「恐れ入ります」

と拳志郎は言いながら顔を上げ、姿勢を元に戻す。

「ところでこちらへは何の御用で来られたのですか?」

「実は今日は我が親友の命日なのです、それでここの裏手にある墓に参る為に来ました」

「お友達がここの出なのですか?」

「いえ、その親友は…」

と拳志郎が続きを言おうとすると

「彼の親友は私の兄なのです。兄は十年前にテロとの戦いを取材しに彼と最前線に行きましたが…銃撃戦に巻き込まれて命を落としました」

とアイリがその続きを拾うかのように言う。

「まあ…。そうだったのですか」

「兄とケンさんは会社での同期で入った時から友情を築きました、それに兄はこちらのマミヤさんとは結婚を誓った仲だったんです」

「…お気の毒な事です」

「我が友…、レイは現場主義でした。どんな時事でも現場へは必ず直行し、丹念に取材しました。俺はそのひたむきさが好きでしたし、彼からはジャーナリストとして大事な事を学びました」

「レイさんとおっしゃるのですか…。その方の名前は」

「ええ、フラガ三兄弟の末の方と同じ名です」

「では、俺はこれで一旦失礼させていただきます。墓参りを済ませたら行かねばならない所がありますので」

と拳志郎はそう言うと親友レイが眠る墓に向かう。

「マミヤさん、アイリさん、貴方達も行きなさい。後の事は私に任せて」

「園長、よろしいのですか?」

「なあに、かまいませんよ」

フドウはマミヤとアイリにも墓参りを促す。

「私もここで子供達の世話をしていますから気にしないで行ってらっしゃって下さい」

「そんな…王妃様まで」

「私も園長と気持ちは同じですわ」

「ありがとうございます…ではお言葉に甘えまして」

こうしてマミヤとアイリも拳志郎と共に墓参りをする事になった。

「兄さん、ケンさんが来てくれたわよ」

「…レイ、久しぶりだな」
三人は墓の前に花束を添えて、レイに声を掛けながら祈る。
「もう、十年も経つのね…貴方が死んでから…ケンから貴方の死を聞かされた時、一度だけ彼に恨み言を言ったわ、『どうして引き止めてくれなかったの!?』って…でも後で貴方がいつも言っていた事を思い出したわ…『もし俺が死んでもケンを恨むな、その時は俺を恨め』って…ケンもケンで唯一言『すまなかった』って…」
「俺はあの時、レイを救う事も生かしてやる事もできなかった…マミヤ、お前に恨み言を言われて当然だ…」
「ケン…あの時はごめんなさい」
「いいんだ…どうする事も出来なかったのは事実だから…」
「私は十年前まで目を患って闇の中にいた…兄さんは私の為に光をくれた…そう自分の命と引き換えに…」
アイリは涙ぐむ、レイは自分に生命保険を掛け、受取人を妹にしていた。それだけではなく彼は妹の為に自分の目を提供する事も遺言として残していたのだった。
「そうだな、俺はアイツが死ぬ間際に聞いたよ、『それで妹の目に光を与えてやって欲しい』と…」
「ええ、だから私はもう寂しくなんかない。だって私の目の中に兄さんがいる、いつだって兄さんと共に生きているんですもの」
「…」
拳志郎は黙り込むと再び祈る、祈りながら十年前の事を思い出していた…。

十年前、最前線で…
『フツ…やられちゃったぜ…』
『レイ!しっかりしろ!』
レイは胸に銃弾を受けた、傷口から血が次々と流れ出てくる…。
『無理…だな…ケン、どう見ても心臓に…いっちゃってる…助から…ねえよ…ガフツ!』
『レイ!喋るな…今すぐ運ぶ』
『やめとけ…無駄だっ…って…』
『…レイ』
『ケ…ケン、死ぬ…前…に頼み…が…あ、ある…聞いてくれ』
『レイ!弱気になるな!!』
『いいから聞け…お、俺は…俺…自身…に…生命…保険を…掛けて…いる…俺が…現場主義…だって…のを…知ってる…だろ?…だから…ガフツ!…い…いつか…この…時が…来る…事を…予想して…』
『ああ、俺は何をすればいい?』
『俺の…妹…アイリ…に…その保険…で…光を…あ、与えて…やって…欲しい…』
『…分かった』
『まだ…ある…もし…アイリの…目に…移植手術が…必要…なら…俺の…目を…くれて…やる…そう遺言に…書いた…だから…』
『ああ、お前の目を提供してやって欲しいんだな』
『そ…そうだ…た…頼む…これを聞いて…く、くれる…のは…お、お前…しか…いない…』
『分かった、分かったからもういい、これ以上喋るな!』
『フツ…俺は…ひどい…男だぜ…アイリ…と…マ、マミヤ…二人の…女を…不幸に…しちまっ…た』
『レイ!』
『アイリ…すまない…お前が…ふさわしい…男と…結婚…するのを…見届けて…やれ…そうも…ない…マミヤ…許して…くれ…ない…』
レイはガクッと崩れ落ち、息絶える。
『レ…レイー…ッ!!!』

墓参りを済ませた三人は南斗園に戻る…
「貴方のお兄さんの事はフドウ園長から聞きました…最後まで妹である貴方の事を案じてらっしゃったのですね」
「はい、兄さんのおかげで私は今、全てを見る事ができます。この目には兄さんがいます」
園長室でラクス、フドウと共に三人は話の場を交えていた。
「ところで拳志郎さん」
「はい、王妃様」
「貴方は CP9 製薬の薬害疑惑を追ってらっしゃるそうですね」
「はい、ご存知かと思いますが例の血液製剤『エニエス』に続いて『ゴードム』というとんでもない薬を開発し販売しております。新たな犠牲者が出るのを何としてでも食い止めなければなりません」
「それは福岡の病院に入院してらっしゃる高畑さんという方との約束なのですね」
「はい、俺はあの夫婦と誓いました。『CP9 の不正を暴き、奴等を法の下において裁きを受けさせる』と」
「でしたら私も貴方のお手伝いができるかもしれません」
「といいますと?」
と拳志郎が質すとラクスはフドウの机に向かい、そこに置いてあった一通の封筒を拳志郎の前に差し出した。
「王妃様、これは」
「貴方は我が王室が領土内の島に総合研究所を設立しているのはご存知ですよね?」
「はい、アカデミア総合研究所の事です」
「ええ、そこに最近 CP9 の研究所をクビにされて移籍してきた方がいます。あの『ゴードム』の開発者ですので話を聞いてみたらいかがですか」
「そうですか、ならば是非」
「そう言うと思ひまして研究所所長の星博士宛てに私からの添え状を書きました。これを見せれば研究所へ入る許可が出る筈です」
「ありがとうございます、お言葉に甘えまして頂戴いたします」
拳志郎はラクスの添え状を押し戴いた。
「拳志郎さん、この後は福岡へ?」
「そうしたいところだが王妃様からの折角のご好意だ、アカデミアに寄る事にします」
「そうですか、ところで壬生国の方は?」
「リンとバットに任せてある、ジュウザも関東で麻薬関連の事件からリブゲートの足取りを追っている」
「やはり、避けられませんか。壬生国の混乱は」
「ああ、そうなるな。もし、孤児達が出るような事になれば…その時は頼む」

「分かりました」
「その時は我が王室でも手助け致しますわ。そうそう、キラも貴方に一度お会いしたいと言っていましたわ」
「その折には是非お願い致します」
こうして拳志郎は当初の予定を変更し、アカデミアにいるガジャに会う事にした。

その頃、アカデミアでは…

「おい豪、やけに嬉しそうな顔してるじゃねえか。何かいい事でもあったのか?」

天宮勇介は笑顔を見せながら尾村豪に話しかけていた。

「勇介、聞いてくれ。実は母さんがあと一ヶ月もすれば退院できそうなんだ」

「ホントか!?よかったじゃねえか!」

「ああ、これもあの先生のおかげだ」

「確か、この近くの島にある診療所の医者だったな。国王とは学生時代からの親友だっていう」

「そうさ!国王様が紹介してくれただけの事はあるよ」

「どうした?何かあったのか?」

その二人に月形剣史、仙田ルイ、岬めぐみ、大原丈の四人も話に加わる。

「おう、豪の母さんがな、あと一ヶ月で退院できるまで回復したんだってよ」

「ホントに!?おめでとう豪!」

「よかったなあ、『ゴードム』の副作用から抜け出たわけか」

全員が豪を祝福する。

「ありがとう、みんな。あの診療所の先生は名医だよ、親身に診察や治療も行ってくれるし」

「そうだな、俺もその先生、確か『チョッパー』っていう名前だったかな。あの先生が豪の母さんを診察している時をチラッと見かけたが本当に親身になってたよな」

「相当な苦勞人だからよ、地元の人の話だと顔のせいでつらい人生送ってきたんだって」

「そのせいか、例え褒められても『うるせ〜なあ〜、んな事言われても嬉しくもねえぞコノヤロ〜!』って嬉しそうな顔しながら言うもんな」

「照れ屋さんのね、チョッパー先生は」

とみんな笑顔で話していると

「お取り込み中のところを申し訳ないのだが」

と一人の男が彼らに近づく。

「何か?」

とめぐみが尋ねると

「ガジャ博士にお会いしたいのだが薬学研究室はこちらかな?」

と男は彼らが立っている場所からちょっと離れたところにある扉を指差す。

「ええ、私達その研究チームですけど…ガジャ博士に御用ですか?」

「ああ、俺はこういう者だが…」

と男は名刺を出してめぐみに渡した。

「!?『五車星出版社』記者…霞拳志郎!?!」

「何だって!?CP9の薬害疑惑を追っている、あの?」

そう、めぐみに名刺を渡したのは拳志郎だった。彼はアカデミアに着くと所長の星博士にラクスからもらった添え状を渡し、『機密情報以外なら』という条件つきで取材と入所を許可されたのだった。

「ラクス王妃から聞いてここへ来たのだから…」

「い、います!呼んでみましょうか?」

「いや、研究の邪魔なら無理には言わない」

「もしかして、『ゴードム』の一件で」

「ああ、その事もあるが…CP9の内部の実態も知りたくてな」

「なら尚更だ。俺、博士に言ってくる」

丈は研究室へ走っていった。

「おい豪、ちょうどよかったじゃねえか。お前の母さんの事について話してみたらどうだ」

「そうだね、拳志郎さん、聞いていただけますか?」

「ああ、いいとも」

拳志郎はジャケットのポケットからメモとペンを取り出す。

「実は僕の母さんはインフルエンザに罹っていたのですがその時に『ゴードム』を投与されたんです、その結果母さんはしばらくの間ひどい発疹が出て苦しんでいました」

「それは最近の事かい?」

「はい、幸いにもこの近くの島の診療所に医者がいて偶然ここを視察に来ていたキラ国王が母さんの事を聞いて下さり、その医者を紹介してもらって治療を受けさせてもらったところ、あと一ヶ月で退院できるまでに回復しましたけど」

「なるほど、君の母親も被害者の一人なのか」

「はい、それに…」

「それに?」

「貴方はbiasとspanダムの方はご存知ですね?」

「ああ」

「僕とここにいる剣史とルイの三人はbiasの門下生でした、spanダムもその一人です」

「二人は師弟関係か…!もしかして」

「もしかして…何です?」

「君達三人はbiasの黒い噂について詳しく知っているのではないか?」

「ええ、その通りです!もしよければ全てお話いたします!」

と豪が言った時、

「貴方がね?わしに会いたいと仰っていたのは?」

と横からガジャが現れる。

「はい、霞拳志郎と申します」

「おお、噂なら聞いていますぞ。ここでは何ですからわしの事務室へ行きましょうか」

「博士、僕と剣史とルイも話に付き合ってくださいでしょうか？僕達もこの人に話したい事がありますので」
「おお、いいとも。天宮君達は新薬の研究に戻ってくれたまえ、では拳志郎さん参りましょうか」
拳志郎とガジャ、それに豪、剣史、ルイの五人はガジャの事務室へ行き、残りの三人は研究室に戻った。

「…すると貴方はあの『ゴードム』が市場に出回る事に反対だったのですね」
「ええ、その通りです。わしは会社の連中に何度も警告したのですが…聞き入れるどころかデータを盗まれてクビにされました」
「どうやって盗まれたのかご存知ですか？」
「実はわしをここに紹介してくれたリー・ケフレンというコンピュータープログラマーがいます。わしは彼が試作品として作ったセキュリティーソフトにデータを保存し、更にこの『クリプテックス』という入れ物にそのデータを入れたメモリーを入れて無理やりにも見れないように保管していたのですが…二つとも簡単に破られました」
「クリプテックスを見せながらガジャは拳志郎に『ゴードム』いや『ゴーレム』のデータを盗まれ解雇された経緯を語る。
「これがその『クリプテックス』…初めて実物を見ます」
「おや、ご存知なのですか？」
「ええ、ロバート・ラングドン教授の事は我が五車星出版社で発行している『週刊北斗』の人物発見伝で取り上げた事がありますので」
「ほう」
「話を戻させていただきますがその二段構えで保管していたデータを簡単に破られたと言いましたがその事で何か不審な点に気づいた事はありませんか？」

「さあ…」
とガジャは考え込んでいたが
「これが不審な事かどうかは分かりませんが…データが盗まれた二・三日前から研究所の警備員が四人増えたのです。今、わしに代わって CP9 開発研究所の所長をしている氷室巖という男、あの時はわしの助手をしていたのですが彼が言うには新人として入ってきたと説明してましたが…」
と答える。

「…なるほど」
拳志郎の目が何か分かったかのように光る。
「博士、もしかするとその四人は CP9 の手先かもしれませんよ」
「な!?するとその四人が…!!氷室もあの時からグルになって…」
「断定はできませんが俺の考えでは可能性は大です」
「ぬう…」
「クソッ!CP9、いやスパンダムの奴!!どこまで汚いんだ…」
と剣史が悔しがる。
「話を交えていただきます、月形君と仙田さん、それに尾村君と言ったね。君達があのピアスの門下生だというのは先ほど聞いたが彼の黒い噂について詳しく聞きたい」

「はい、あの男が壬生国の大学病院に勤めていた事はご存知でしょうか？」
と豪が話を切り出す。
「ああ、聞いた事がある」
「僕達もその大学病院で勉強してましたが卒業後もそこに勤めていたんです。その頃でしたか、あの男が医療ミスを行ったらしいという噂がありました」

「そういえばそんな事件があったな、しかし報道で流されていた情報では…」
「ええ、別人です。しかし実はあの男、当時日本に進出しようとしていたスパンダムの甘言に乗って別人に濡れ衣を着せたんです。というのもその計画を僕達三人にも漏らしてましたから」

「何!?わしもそれは初耳だ」
話を聞いていたガジャは驚く。
「この濡れ衣の顛末を聞いた僕達は事実を公表しようとした。ですが、既にカルテなどは改竄された上に元のカルテなどの証拠品は全部焼却された後でした。それ故、僕達は失望して大学病院を辞め、ここへ来たんです」

「そういう事だったのか…」
拳志郎は納得した顔になる。
「拳志郎さん、お願いです!ピアスの暴走を止めてくれませんか、塔和大の事件の事を聞いた時、また同じ事を繰り返すのかと思いました。あんな男でも私達にとっては恩師です、もう悪事から手を引いて欲しい。それが私達の切実な願いです!」

ルイは拳志郎に頼み込む。
「もちろんだ、あそこは俺の母校だし、俺の恩師が窮地に陥っている」
「恩師…もしかして」
「ああ、経済学教授の柳沢良則だ」
「あの人が!拳志郎さんの恩師…」
「だから俺も無関係ではいられない、それに教授の娘の恋人が薬物中毒に陥れば尚更だ」
「じゃあ、あのニュースで取り上げられた青年というのが…」

と豪が言うと拳志郎は無言で頷いた。
「それだけではなく、俺の友がサザンクロス病院の院長を務めている。その男も奴等の悪事に加担させられている、それを止めたい」
「分かりました、ならばこのわしからも頼りになる人物を紹介しましょう」
とそれまで聞いていたガジャが言う。

「その人物とは？」
「一人は CP9 で MR をしている男でモンキー・D・ルフィといいます。彼は頭は決してよくありませんが努力家でしてな、わしのところへよく薬の事について勉強しに来ていました。あと、スモーカーという男とタシギという女がおります。この二人は CP9 が日本に進出してきた時からの社員でしてな、気骨ある故に上層部に疎まれて閑職に置かれてますがそれでも内部告発しようと奔走しております。わしのところにも接触してきた事があります」

「分かりました、ありがとうございます。その三人とはゼーラに行ったら接触してみる事にします」
拳志郎はガジャが挙げた三人の名をメモに書き込んだ。
「ああ、ついでにもしルフィに会ったら伝えてくれませんか。『わしの事は心配するな、今アカデミアで『ゴーレム』の安全性を更に高める研究をしている、決して軽率妄動するな』と」
「分かりました、お伝えしておきます」
こうして粗方取材を終えた拳志郎はアカデミアを後にして神戸を向かった。

「おお、朋友(ポンヨウ/作者註: 朋友とは中国語で親友、仲間、同士という意味)!!」
次に拳志郎が向かった先は『青幣(チンパン)』という貿易会社だった。
この会社の社長である潘洸淋は十年前のテロに巻き込まれて左足を失い、重傷に陥った所を拳志郎とレイに助けられたばかりか妹の玉麗を保護してくれた事がきっかけで知り合った。その後回復し、故郷の上海に戻って『青幣』を設立、貿易業を始めて軌道に乗ったところで会社ごと神戸へ移転した。彼が神戸に移転したのは貿易に有利なところであるという仕事上の理由もあるが広東人民共和国の独裁体制を嫌悪し、親友の拳志郎の誘いもあって日本に移住し、一家で国籍を取得した。
「久しぶりだな潘、事業の方はうまくいってるのか?」
潘に歓迎された拳志郎は彼に尋ねる。彼の会社は主に輸入用食材を取り扱っており、近頃ではフィリピンで直接工場を立ち上げて衣料品の取引を始めている。
「おかげさまでな、順調に業績を伸ばしているよ。何せ、中華の食材は需要が多いからねえ、無論西洋料理用の食材も取り扱うようにして、そちらでも収入が多くなっている。最近ではフィリピンでの衣料品製造も立ち上げたばかりだ。それはそうと拳志郎、ここへ来たのは?」
「ああ、最近の神戸の状況を知りたい。それと仕事上のトラブルはないか、どんな些細な事でもいい」
「我が社に関してはこれといったトラブルはないが…。実は最近、貿易で取り扱っている積荷の中に麻薬が紛れて出回っているらしいんだ」
『黄色い馬』か…。
「知っている、関東連合を中心に流行りだした奴だな。それがどうもコロンビアからアメリカ、更にロシア、中国を通じてこの神戸の港に着くらしい。そのやり方も巧妙でな、例えば上海蟹の甲羅の内側に隠したり、トリュフのコンテナの中に新型の防腐剤として入れていたりして。俺も部下に命じてコンテナを厳重に検査させていてな、警察にも常時立ち会ってもらっている。今のところは俺の所からは出てはいないが他の所から例に挙げた事が発覚しているんだ」
「確かに相当巧妙だな、で警察はその詳しいルートは掴めているのか?」
「いや、残念ながらあの『特強』でさえ掴めていないらしい。ただ、最近地元の警察がブローカーを一人捕まえて白状させたところ、関東にロシアンマフィアが関わっているという情報が掴めたそうだ」
「他には?」
「うむ、それだけしか掴めなかったそうだ。というのもそのブローカーが白状した次の日に留置場で自殺したんだ。口の中に毒薬入りのカプセルを仕込んであったな」
「そうか…。関東連合でジウザが調べている。彼次第だな」
「おお、あの『雲』の男か。お前がいつも話している、あの男ならやってくれるさ」
と潘はここで一旦話をとぎと
「なあ拳志郎、お前結婚する気はないのか?」
と話題を変える。
「急に何の話だ?潘」
「いやなに、実は…玉麗をお前に嫁がせたいと思っている。玉麗もお前にその気があるようだし、俺としてもお前がまだ一人身というのは寂しいような気がしてな…」
しかし拳志郎はその言葉に対し、無言で首を横に振ると
「折角の好意ではあるが…俺は例え三度懇願されても断るつもりだ」
と彼の提案を断る。
「そうか…お前、あの時死んだ女を…その顔は何度言っても同じようだな。すまなかった、忘れてくれ」
「いや、俺こそすまなかった。お前の好意を無駄にしまして」
「ハハハ、まあいいさ。それよりどうだ?再会ついでにささやかだが食事しよう。玉麗もお前の顔を見れば喜ぶだろう」
と潘は拳志郎を食事に誘う。
「いいとも、今夜は大いに語ろう」
拳志郎も彼の誘いに笑顔で応じた。

その頃、ゼーラでは…
「で、お前はあのスパンダムに恨みを持ってるわけか」
「恨みというか…俺、あの野郎のやり方に我慢なんねえんだ」
ルフイは松江にある教会の一室で環境 NGO 団体『ゲッコーステイト』のリーダー、ホランド・ノヴァクに会っていた。無論、サンジの紹介である。
「それにしてもホンマに凄い奴やなあ、お前。あのスパンダムをどついたとは」
この一室にはルフイとホランドの他、牧師二人ともう一人いかつい髭をした男がいた。
「何というか…。君、はちゃめちゃだねえ…」
二人の牧師の一人、金髪で箒みみたいな髪型をした男が呆れながら言う。
「しかしホランドよ、この男を我々の仲間にしてもいいのか?わしはどうも CP9 で働いていたというのが気になる」
といかつい髭をした男が懸念を口にする。
「いいじゃねえか、ケンゴウ。どっちにしてもあの CP9 の実態を知る奴が入ろうとしてるんだ。後はストーナーに『ray=out』で暴露させりゃ奴等の喉下に突き立てれるからな。よし、ルフイと言ったな。いいぜ、お前を歓迎する」
「ホントか?ありがとな～」
こうしてルフイは『ゲッコーステイト』に加わる事になった。

3
「だめだ、断る」
カリスマ整体師、三条幸人は目の前で土下座している白亜凌駕に対して冷たく言い放った。凌駕は『恐竜や』を建て直す為に幸人の協力を仰ぎに来たのだった。
「お願いしますよ、三条さん!店を建て直すには貴方と仲代先生の協力が必要なんです」
「何を言う、そもそもあんな怪しげな男の誘いに乗ったお前達が馬鹿なんだ。それだけじゃない、あのカレーなどの料理では到底無理だな」
「そこを何とかして欲しいと頼んでいるんです!お願いしますよ!」
「ダメなものはダメだ、諦めろ。あんな店、さっさと閉店してしまえ。話は終わりだ、俺は忙しいんだ、そんな所で土下座されても迷惑だ!帰れ」
幸人はそう言い捨てると自分の診療所に入って行ってしまった。後ろから凌駕の悲痛な叫びが続く。
「待って下さい、三条さん!そんな事言わないでお願いしますよ、三条さん!三条さん!!」

「どうでした?アスカさん、仲代先生の方は」

幸人の診療所を後にした凌駕は落ち合い場所の公園で大野アスカと会っていた。アスカも『恐竜や』の建て直しに協力してもらう為にかつての常連客だった仲代王琴に頼み込みに行っていたのだった。

「それが…こちらもだめでした。『俺はもうあんな店に興味はない、あのホテルの片隅がお前達に一番相応しい』とまで言われてしまいましたよ…」

アスカは力を落としたように答える。

「そうですか…」

「もうダメなんですか?僕達は…」

「そんな事ありませんよ!アスカさんまで諦めてどうするんですか!?まだ希望はある筈です!!」

「しかし…」

「ほら、アスカさんもそんな暗い顔しないで何とか対策を考えましょう。俺はもう一度三条さんの所に頼みに行ってきます。今度は梃でも動かないつもりです!」

凌駕は沈んでいるアスカを励ます。

「凌駕さん…」

アスカもぎこちない笑顔を彼に見せる。

「それじゃ、また仲代先生の方をお願いしますよ!」

「え、ええ分かりました」

二人は分かれる、しかし運命の女神は彼らに味方する事になった。

(おや?)

ジュウザはこの日も水商売の店などを回りながら塔和大の事件と麻薬ルートの手取りを追っているところだった。その彼が目にしたのは…

「よう!凌駕じゃねえか。なにやってんだ?こんな所で」

そう、彼が声を掛けたのは凌駕だった。

「ジュウザさんじゃありませんか!」

声を掛けられた凌駕は驚く。ジュウザが店の数少ない常連客なので二人は顔見知りなのだ。因みにジュウザは龍之介が入れるコーヒーが好きなのである。

「どうした?店なんかおっぱり出して」

「おっぱり出してるんじゃないんですよ、店を何とか立ち直らせたくていろんな所に頼み込んでるんです」

「なるほどねえ」

「ジュウザさん!ここで会ったのも何かの縁だ、俺達を助けてもらえませんか、お願いします!」

「う〜ん」

ジュウザは腕を組む、実は彼も幸人や王琴と同様に『恐竜や』を再建するのは非常に難しいと思っていたからだ。

「だめ…でしょうか?」

と凌駕は考え込んでいるジュウザに不安な面持ちで尋ねる。すると

「いや、そこまで頼んでいるんだ。こうなったら一肌脱いでやろうじゃねえか!」

とジュウザは明るい顔をして凌駕の頼みに答え、自分の胸をポンと叩いた。

「本当ですか!?ありがとうございます!助かります!!そうだ、こうしちゃいられない、アスカさんに伝えなきゃ」

と凌駕は携帯を取り出してアスカに掛けた。

「もしもしアスカさん、今どこにいます?…まだ仲代先生の所へは行ってませんか…それはもういいですから戻ってきてくれませんか、救いの神様が現れてくれたんですよ!…」

「それは本当ですか!?!」

凌駕からジュウザが力を貸してくれる事を聞いたアスカは思わず叫んだ。

「ああ、コイツに約束したからな」

「ああ凌駕さん、前途に光が見えてきました」

彼の顔にも喜色が満ちた。

「よし、早速行動開始だ。まずはアイツの力を借りる必要があるな」

「?誰かお知り合いでも?」

「ああ、俺の競馬仲間だ。アイツの料理に関する知恵が欲しい」

「料理好きなんですか?その人」

「というより『食』に関してうるさい奴なのさ」

「?」

「まあ、行けば分かるって。二人ともついてきな」

とジュウザが行こうとすると

「よう!凌駕にアスカじゃねえか」

と『スクラッチエージェンシー』の久津ケンがやってきた。彼はこの日もジャンと共に盗聴器を探し、回収していたのだった。

「ケンさん!こんな所で何を?」

「いやなに、仕事さ。その途中で前等を見かけたもんで来たんだけど、何話してたんだ?」

「実は店を建て直そうと奔走してたんですがここにいるジュウザさんが力を貸してくれる事になったんですよ。何でも『食』にうるさい人を紹介してくれるそうなので」

「何!?よっしゃ!!だったら俺も手を貸してやろうじゃねえか!!あの一件で悲惨な状況に追い込まれたおやっさんを助ける為だったら何でもやるぜ!!」

ケンは意気込んで言う。

「それはいいですけど…仕事の途中でしょ、いいんですか?」

「なあに、仕事っていつてもジャンが殆どやってるようなもんさ。暇持て余してるからかまやしねえよ」

「どうなっても知りませんよ」

「とにかく行くんだろ?その『食』にうるさい奴の所へ、ほんじゃ行きますか」

とケンは話を切り上げる。

「やれやれ…まあいいか。んじゃ皆さん、ついてきな」

こうして四人はジュウザの言う『食』にうるさい人物の元に向かった。

「お、おい…ここって…」

「見ての通り『東西新聞社』だ」

「…それじゃ貴方の競馬仲間で『食』にうるさい人って…」

「そういう事」

四人は『東西新聞社』の建物の前に立っていた。そう、ジュウザが会おうとしていたのは山岡士郎だったのだ。

「まさかあの人だったとは…」

「それじゃ行くぜ皆さん」

とジュウザは呆然と立っている三人を尻目にスタスタと建物の中に向かって歩いていく。

「…はっ、ちよっ、ちよっと待って下さいよ!ジュウザさん」

「置いてくんじゃねえよ」

我に返った三人は彼の後を追った。

「なるほどねえ、んで俺に縋ってきたという訳か」

「人間きの悪い…力を貸してくれって言ってんだよ」

ジュウザから力を貸して欲しいと頼まれた士郎は腕を組んで考えていたが

「悪いな、この件は断る」

と突っぱねた。

「おいおい、そりゃあないだろう?『食』にうるさいお前だからこそ頼んでんじゃねえか」

「あのなあ、俺はプランナーじゃないんだ。店の建て直しなんてやった事ねえんだよ」

「嘘つけ、確かすき焼きの専門店を乗っ取られた男が新たに開いた店を手助けしてやったって話を聞いたぜ。あれも建て直しじゃなかったのかよ」

「ああ、違うな。あれは親父への意地でやった事だからな」

「そんなもんかねえ、とにかく頼むよ、競馬仲間じゃねえか」

「とにかくダメなものはダメだ」

「じゃあさ、雄山先生に頼んでもらえねえか」

「冗談きついぜ、何で俺から親父にお前の持ち込んだ一件を話さなきゃなんねんだよ」

「よく言うよ、確かに前と雄山先生の確執は知ってるけどさ、ゆう子ちゃんと結婚してからは縋りを戻して和解したじゃねえか」

「確かにそうだがそれでもお断りだ、話は終わりだ」

「ちよっと待ってくれ、山岡さんよ!アンタ困ってる連中を見捨てるのかよ!?ここまで逼迫している連中がいるってのにそれも無視すんのかよ!?!」

二人のやり取りを黙って聞いていたケンが怒って立ち上がり、士郎を詰るが

「言った筈だ、俺はプランナーじゃない。あくまで新聞記者だ、アンタ達には悪いが出来る事と出来ない事がある、それだけだ」

と士郎は冷ややかに言ってロビーから去っていった。

「何だよあの野郎!人が折角助けを求めてるのに…」

「まあまあ、ケンさん落ち着いて」

「何言ってんだよ!?!店を建て直したくないのかよ!?!」

「そうですね…」

「おいケン、怒る事ないぞ。まだ手はある」

「?どういう事だよ?」

「なあに、『将を射んとすればまず馬を』さ」

「もしかして雄山先生の所へ行くんですか?」

「いや、その前に会っておきたい人がいる」

「誰です?その人」

「分からないか?アイツは結婚してんだぜ」

「まさか!?!」

「そう、その『まさか』さ」

ジュウザは三人に笑顔を見せた。

「そうですか…夫がそういう風に答えたわけですか…」

ジュウザ達は『東西新聞社』を後にして士郎のマンションに来ていた。そう、彼の妻であるゆう子(旧姓:栗田)に会いに行ったのである。

「という訳でさ、一つゆう子ちゃんに力を貸してもらいたいんだ」

「分かりました、あの人を説得してもらいたいわけですね」

「ああ、それと雄山先生に会わせて欲しい。これが出来るのはゆう子ちゃんしかいないんだよ」

ジュウザは両手を合わせてゆう子に頼む。

「いいですよ、事情は分かります。今から行って頼んでみましょう」

「さすがゆう子ちゃん!話が分かるねえ」

「ただ言っておきますが、知っての通り雄山先生は気難しい方です。凌駕さんと言いましたね、貴方がたの事情はお話いたしますがその先は非常に難しいと思って下さい」

「ええ、その事は舞ちゃんから聞いて知ってます」

「舞ちゃん?」

「凌駕さんの姪ですよ。雄山先生、前に『怪談亭』に行かれた事を知ってますか?」

「いえ、そういう事は聞いてませんが…」

「あの日、あの店の女将を怒鳴りつけているところをあの子がこっそり見てたんですよ。その時の事をあの子から聞いてますから」

「…そうですか、しかしそれ以上に厳しいという事は覚悟しておいて下さい」

「分かりました」

「では仕度いたしますので待っていただけますか、陽士、遊美、遊璃、おじいちゃんの所へ行きますよ」

ゆう子は子供達を呼びながら仕度をしにリビングを後にした。

「……」

「という訳でこの人達が海原さんに助力を請いに来たのです。いかがでしょうか?」

ここは海原雄山が経営する料亭『美食倶楽部』の離れ、雄山が普段住居同然に使っている所である。息子の嫁であるゆう子から事情を聞いた彼は瞑目し、腕を組んでいた。しばらくして目を開けると

「…お前達」

と冷ややかな声でゆう子やジュウザ達に言う。
「…はい」
「わしがどういふ男か、ここにいる女から聞いている筈だが」
「…はい」
「ならば帰れ!これ以上はわしの耳が穢れるわ!!」
とジュウザ達を怒鳴りつけて立ち上がる。
「待って下さい!!雄山先生」
「えーい!気安く『先生』と呼ぶな!!」
「そう言わずに話を聞いていただけませんか、お願いします!」
「黙れ!!これ以上聞くつもりはないと言った筈だ!!さっさと帰れ!!」
「何だと!!人が下手に回っていきやあ、いい気になりやがって!!」
余りにも冷たい雄山の態度にケンが逆ギレするも
「やめて下さい、ケンさん!!俺達は言い争いの為に来たんですか!?!」
と凌駕が止める。
「しかし!!」
「いいからもう貴方は黙って下さい!雄山先生!!確かに俺達はしがない喫茶店の店員です。ゆう子さんから聞いての通りの状態ですから貴方からしてみれば救いようのない店でしょう。でも俺達にとってかけがえのない店なんです、それにあの店はリブゲートから詐欺同然でホテルの片隅に追いやられました。例え全で一から出直す事になっても俺達はあのリブゲートの不当な扱いから自由になりたいんです、お願いします!!」
と凌駕は必死の面持ちで雄山の前に土下座して彼に懇願する。
「海原さん、彼らも必死なんです。私からもお願いできますでしょうか」
とゆう子も彼を説得しようとする、すると
「…お前、名は?」
と雄山が凌駕に名前を尋ねる。
「白亜凌駕と言います!」
「そうか…白亜凌駕と言ったな、今『全てを一からやり直してでも』と言ったな」
「はい!」
「フム…わしもリブゲートの噂は聞いておる、あの会社の系列の料亭に行ったが最悪だった。そのリブゲートにお前達が被害にあったというなら話は別だ」
「では!!」
「話はまだ終わっておらん!顔を上げてわしの顔を見る」
と雄山は凌駕に顔を上げさせて、彼の顔をじっと見た。やおら
「どうやら今言った事は本気のようなだな。よかろう、今回だけは手を貸してやる」
と厳しい顔を少し崩して言った。
「本当ですか!?!ありがとうございます!!」
「但し今回だけだ!また店が潰れるような事があっても助けんぞ!!それに全てを一からやり直すと言った以上、わしは厳しく叩きなおすぞ!覚悟はいいな!?!」
「はい!!覚悟はできています!!そうですね、アスカさん!!」
凌駕はアスカに声を掛ける。
「ええ、こうなったら僕も腹をくくりましょう!」
「よく言った、だがわしは単なる美食家に過ぎん。店の建て直しにはわしが嫌うあの男の協力も必要になろう」
「?」
「あのう、もしかして…」
とゆう子が雄山に尋ねると
「ああ、あの派手にパフォーマンスをやるあの男だ。『食』に関する実力は少しはあるようだがな」
「ゆう子ちゃん、誰なのさ?」
とジュウザが小声で彼女に尋ねる。
「村田源二郎という方をご存知ですか?通称『味皇』と呼ばれている」
「ああ思い出したよ、『週刊北斗』の『人物発見伝』のコーナーでも取り上げた事がある、雄山先生にもこのコーナーに関して取材を申し入れたけど断られた事があってさ」
小声で話し合っている二人を雄山はジロリと見たが視線を逸らし
「では仕度をするか、その前に奴がどこにいるのかを確認せんとな。お前達はここで待て。ああ、孫達はここへ置いていくように」
とその場にいた全員に言うのと料亭である母屋に向かっていった。

「ほう、それで私に接触してきたわけですか」
「まあな、わしが最も嫌う貴様なら少しはましな経営能力があると思ってな」
場所は変わってここはイタリアンレストラン『シーライオン』。イタリアのベニス出身の料理人ガリバー・トスカーニが妻のミスティ、親友で彼に恋心を抱いていたフィービーの三人で経営している店である。この店で雄山とジュウザ達は村田源二郎と会っていた。彼は『日の出食堂』の味吉陽一の才能を見抜き愛でていたがこのレストランも『日の出食堂』に次ぐ実力者としてこの店に通う事が多い。それ故、このレストランでジュウザ達は村田に会う事になった。尚、このレストランはビルの一角に店を構えており、そのビルの屋上にはあの『ダークシャドウ』の拠点がある。
「事情は分かりました、いいでしょう。弟にも協力させましょう、私よりも彼なら経営能力は上ですからな」
「フン!『將軍』と自称している奴か」
「いつもながら手厳しいですな、雄山さん」
「貴様達兄弟が派手なだけだ!」
「これはまた手厳しい」
「まあいい、貴様達の事は後日としてその『恐竜や』とやらへ行くとするか。どれほどひどいのか見ておかねばな」
「雄山さん、変わられましたな。一つの料理店の事などに目を向けようとせずひたすら批評していましたが…息子さんがご結婚なされてからですかな」
「土郎の事は関係ないわしとて今から行く店なぞ潰れてもかまわんと思っておるわ!…だが、少しは骨のある奴がいるようでな」
と言いながら雄山は凌駕を指差す。
「ほほう、貴方の気持ちを变えましたか、彼が」

「わしはただ奴が『全てを一からやり直してでも』という言葉を採用したに過ぎん」
「まあいいでしょう。では行きましょうか、その喫茶店へ」
すると
「あのう、私もついてきてよろしいでしょうか？」
と言い出した者がいる、ウェイトレスのフィービーだ。
「ほう、貴方もその店に興味がありますかな？」
「ええまあ…皆さんのお話を聞いていて私も何かお手伝いができるかなあとと思ひまして」
「私はかまいませんが…皆さんはいかがですか？」
と村田が尋ねる。
「勝手にするがいい、わしからは何も言わん」
「俺はかまわないぜ」
「アンタ、女性ならいいって思っただろ」
「むさ苦しい男ばかりじゃねえ」
「俺もいいですよ、ウェイトレスである貴方の視点から何か変えられる点があると思いますので」
「僕も凌駕さんと同じです」
「という訳です」
「よかった、じゃガリバーに話してきますから」
「もう聞いているよ」
とフィービーの後ろからガリバーの声がした。彼女がびっくりして振り向くと後ろにガリバーとミスティが立っていた。
「いつの間に!」
「そりゃ、客の少ない時間帯で話をしていりゃいやが上でも聞こえるさ」
「そうなの…で」
「私はいいいわ、行ってらっしゃい。夕方までに戻ってくればばいから、そうでしょ貴方」
「ん〜…まあいいか。ただ、夕方までには戻ってきてくれよ。忙しくなるから」
「分かった、ありがとう二人とも」
こうして一行に村田とフィービーが加わり、『恐竜や』を下見する事になった。

「ここですか…道理で寂れている訳だ」
「フン、ありきたりの喫茶店だな」
村田と雄山の批評を聞きながら一行は店の中に入る。するとそこには意外な人物が来ていた。
「士郎!! 貴様、何故ここに!?」
雄山は店に入るなり驚いた、何故ならそこにはジュウザ達の頼みを断った筈の山岡士郎がいてカレーライスを食べていたからだ。
「何だ雄山、アンタも頼まれたのか。この店の奴等にも」
「貴様、断ったのではなかったのか」
「ああ確かに、だが一応どういう店か見ておこうと思ってな」
「フン! 嫁に諭されたか」
「そんなんじゃねえよ」
親子二人の話を聞いていたゆう子とジュウザは顔を見合わせ、やれやれといった表情と仕草をする。それから視線をカウンターに戻すと
「あれ!? 美紅さんまでどうして!?」
ゆう子が驚いたのも無理は無い、夫の士郎の隣に久住美紅もいて彼と同じようにカレーライスを食していたからだ。因みに山岡夫妻と広志・美紅は広志と美紅が雄山の『美食倶楽部』への出入りを認められている事から知り合っている仲なのである。
「こんにちは、ゆう子さん。私、士郎さんに頼まれて来たのよ。この店の融資をしてあげて欲しいって」
「おい、余計な事を言うな」
士郎は美紅を嗜める。彼はジュウザ達の頼みを断った後、不安になり広志の所に電話してジュウザ達の話していた事を伝えた。広志は彼らの窮状にリブゲートが絡んでいると知るや知り合いであるオラシオン証券・金上鋭社長と谷津田・スカイフーズ社長に資金面や空き店舗・什器調達の件で協力を頼み、了承を得た後「俺が正面から出る事は大きなリスクになるが、婚約者の美紅が出るなら問題はない」と前置きしてから士郎に影ながら支援する事を伝え、美紅に動いてもらうよう頼んだのであった。
「なるほどね、そういう事か」
とジュウザは納得する。
「ところで士郎、ここのカレーを食してたがどうなのだ?」
と雄山が尋ねる。
「ああ、はっきり言ってやる。アンタが食べるまでもない、これじゃだめだな」
「え!？」
と龍之介は士郎の直言に戸惑う。
「龍之介さん、アンタには悪いがこのカレーなら家庭でもできる程度のものだ。前の場所ならある程度客は確保できただろうがな」
「そ、そんな…」
「おい待てよ、アンタいくら何でも言いすぎだろ! 俺は好きだぜ、ここのカレーは」
冷徹な士郎の批評に龍之介は肩を落とし、ケンが憤るが
「おい、そこのお前、いくらお前がこのカレーを好きだと言ってもそれはお前が好きなかっただけであって誰もが食べたくなるようなものじゃないんだ。ジュウザから聞いている筈だぞ、俺が『食』にうるさいという事を」
「私からも言うわ、悪いけど士郎さんの言う通りよ。このカレーだったら私でもできるわ」
「しかしなあ!」
とまだ納得できないケンを尻目に雄山は士郎が食べていたカレーのルーを指に付けて一舐めする。
「フン、なるほどな。士郎にまでこき下ろされる程度じゃ確かにわしが試食するまでもないわ」
雄山に続いて村田とフィービーも同じ事をする。
「確かに仰る通りだ。これでは無理ですな」
「う〜ん、確かにね。もしガリバーがこれ食べてもきつとここにいる人達と同じ事を言うわよ」
「アンタ達まで…おい、おやっさん! 何とか言ってやれよ!! 悔しくないのかよ!？」
とケンが龍之介に発破をかけるが
「ケン君、もういいんじゃないよ。わし等にはもうこの店を畳むしかないという事だったんじゃないよ」

と氣落ちした答えが返ってくる。
「おやっさん!!そんなんでどうするんだよ!?このままじゃあのオカマ野郎のいいようにされるだけじゃねえか!!」
「さりとしてここまで批評されてはもう…」
「おやっさん!!俺はこの店が好きなんだよ!この店を潰してもらいたくねえんだよ!!なあ、笑里ちゃん達からも何か言ってやってくれよ!!」
しかし、
「ケンさん、気持ちは嬉しいけどもう駄目よ。私達…」
「アイツ等にはもう勝てないわよ…」
「わしがいけないじゃ…わしが騙されなければ…」
と『恐竜や』の面々は完全に頭を抱え、暗い表情でうなだれていた。その時、
「待って下さい!!皆さん!!ケンさんの言う通りだ!!」
と凌駕は叫んだ。
「凌駕君…」
「龍之介さん、本当にそれでいいんですか!?ここで諦めてしまっていていいんですか!?」
「しかし…わし等はもう…」
「俺は諦めませんよ!!確かにこの店は酷い状況です、お出ししている料理だって大したものじゃない。でも俺はこの店も皆さんも好きなんです!!皆さんと一緒に仕事をしたいんです!!」
「……」
「俺はここに来る前に雄山先生と約束しました、『全てを一から出直す』覚悟で再建したいと。全てにダメ出しされたんならそこから出直せばいいじゃないですか!!俺達は一体何の為に奔走してきたんですか!?何の為にここにいる人達に来てもらったんですか!?全てが無駄な行為だったんですか!?!」
凌駕は龍之介達に真剣な表情で励ます。
「そうですよ、皆さん!凌駕さんは必死で雄山先生を説得したんです、それを無駄にしていいいのでしょうか?僕にはそんな事できない!!」
とアスカも彼らを励ます。その叫びが響いたのか
「…凌駕君。そうじゃな、ここで諦めてしまったら本当にお終いじゃ」
「そうばい、そうばい!このままあげなオカマ野郎を笑わせるのはつまるもんかい!!」
「言えてる。やり直しましょ、一から出直しょ!!」
と沈んでいた『恐竜や』の面々は口々に言って顔色を取り戻した。
「皆さん…分かってくれたんですね!?!」
「凌駕君、すまなかった。わし等は大事な事を忘れるところじゃったよ」
「おやっさん…よかったぜ」
とケンが涙ぐむ。その光景を見ながらジュウザは呟く。
「ふう、一時はどうなる事かと思っただ。やっぱこうでなくちゃな」

「…という訳でだ、お前達の何名かは他の料理店に修行に出てもらう」
「分かりました」
『恐竜や』の店内でこの店の再建計画が話し合われる。
「凌駕、貴様は和食の修行だ。貴様の性格からしてその方がよく合う」
「はい!」
「さて、他の連中だが…」
「私、洋食ならやってみたい」
と樹(いつき)らんるが言い出す。
「ほう、いいだろう。問題はどこで修行させるかだが…」
「ガリバー君の所はどうかね?」
「私はむしろフランス料理に興味がありまして」
「ふむ…そうだと」
と村田が考え込むとフィービーが
「だったらいい所知ってる、以前ガリバー達と下見で食事に行ったけどあそこ最高だった」
と言い出す。
「どこだ?そこ」
「確か『グストー』って東京に進出してきた所よ。あそこのオーナーシェフのレミーが作る料理はいいわよ」
「俺も取材で行った事がある。本来ならパリの本店の料理長になれるほどの実力者なのに雑用からたたき上げたアルフレード・リングイニって男に座を譲ってこの東京に出店してきたんだからな」
と士郎も言う。
「雄山さん、確か貴方も高い評価をしておりましたな」
「まあな」
と雄山は言葉を濁す。
「ではそこにしますか。樹さん、この私が紹介状を書きますのでそこで修行なさい」
「ありがとうございます!」
「他にはないか?」
「あのう、私も料理修行したいんですけど」
とリジュエルが恐る恐る言う。
「ほう、何の修行がしたいのですかな?」
「私、寿司が好きなので」
「ならば『鳳寿司』という所がある。このわしが紹介状を書く故、そこへ行け。但し凌駕にも言ったがわしは厳しくいくぞ、いいな」
「はい!私も凌駕さんの言葉で吹っ切れました」
「よし、後は店の候補地探しだな」
「龍之介さん、貴方はこの店を一度たたみなさい」
「はい」
「我が弟の源三郎に話しておきますので彼と共に候補地を探すのです」
「はい…しかし資金はどういたしましょう?」

と龍之介が懸念を口にすると
「心配しないで、私はその資金を融資いたします」
と美紅が言う。
「いいのですか!？」
「ええ、私は金融機関などに交友関係がありますから」
「助かります」
「よし!これで再建計画の骨組みが決まったな」
「ジュウザさん、貴方のお陰です。ありがとうございます」
「なあに、俺はただこの店が好きだったからにすぎないのさ」
「とか言って本当はここの女性店員が目当てだったんじゃないのか？」
と士郎がからかう
「ありやりや、バレちゃったか」
とおどけながら言って全員を笑わせた。

「それじゃ、各々行動開始といきますか。俺は仕事に戻るぜ、調べなきゃならない事があるんでな」
とジュウザが店を出たその時である、
「助けて下さい!!」
と一人の女性が彼に駆け寄り、抱きついてきた。

4

「拳志郎さん!お久しぶりですね」
「ご無沙汰しております、高畑さん。具合はいかがですか」
その頃、オーブ、神戸と渡り歩いた拳志郎は福岡のとある病院で療養している高畑和夫と妻の魔美に会っていた。因みに高畑はパンアジアリーグの人気プロ野球チーム・福岡ファルコンズの球団社長である。
「おかげさまで病状は回復の兆しが見えていますが長引きそうな感じがですね」
「それは何よりです、よかった」
「拳志郎さん、CP9 はまたもや…」
「ええ、『ゴードム』の事です。実は昨日、オーブに立ち寄った際にアカデミアの研究所に行きまして、そこでその開発者に会いましたよ」
「え!？」
高畑夫妻は驚く。
「信じられないでしょうがその開発者、ガジャ博士は CP9 の上層部に副作用が強すぎるから時期尚早だと何度も言ったそうですがデータを盗られて追い出されたそうです」
「じゃあ、その人もまた CP9 の犠牲者の一人だったのですね」
「ええ、しかし彼は開発者である故に責任を感じて今『ゴードム』の薬効と副作用の調整を進める研究を続けています」
「…そうですか」
と三人が話している所に一人の男が来る。
「久々だな」
「あぶさん、何故ここにいるんだ」
ビックリして高畑和夫は戸惑っている。男の名は景浦安武、福岡ファルコンズというプロ野球の監督をしている。彼は優しい表情で尋ねる。
「あの薬害だが、どうなっているんだ」
「あのエニエスに加えてゴーレムが入ってきたけど、又薬害だ。この体が恨めしい」
悔しそうな表情の和夫。実家がラーメン屋である王雅治、あのデジタルキャピタル社長の中込威、景浦一家とはラーメン屋を巡り歩き、情報交換し合っていた。和夫は其中で自前で麺を打って作れるほどの腕だった。それが初期胃癌の手術で受けた血液製剤がきっかけで薬害肝炎になってしまったのであった。
「早く元に戻して、好きなだけ日本酒で語り合おう。俺も今度孫が生まれるんだ」
「その時は福岡ファルコンズのユニフォームのミニチュアを贈らなくちゃね」
「有難う」
「そうだ、紹介するよ。この人が以前話していたジャーナリストの霞拳志郎さんだよ」
と和夫は拳志郎を紹介する。
「初めまして、貴方の記事は読ませてもらってます」
「それはどうも、こちらこそよろしくお願い致します」
更にそこへ
「中込社長!」
景浦が驚く。病室へ入ってきたのはあのデジタルキャピタル社長、中込だった。彼が率いるデジタルキャピタルは緩やかな連邦型企業として知られている。最近提携した検索エンジンのアキハバラ@DEEP は個人的に中込が出資しているが決してデジタルキャピタルの資本拡大にはつなげていない。むしろ既存組織が苦しい時に手を差し出して支えるパターンが大半だった。それ故に中込よりも年をとった従業員が多い。
「おや監督、貴方も来てらっしゃったのか。もう一人の方は?」
「霞拳志郎さん、以前話してた」
「おお、お初にお目にかかります!以前、私の事を一部取り上げてくれたそうで」
「いえ、あれはうちの社の者が調べてきた事です。あなたがパワーハラスメントを受けていた事もその際に分かりました」
「そうですか…。ところで魔美さん、例の検事からは何か言われてませんか?」
と中込は魔美に尋ねる。彼の言う『例の検事』とはあの久利生公平の事である。
「いえ、ただあの検事さんは GIN へ移ったそうでそれ以外は…」
「そうですか、CP9 のスパンダムがあの喪黒福造とつながったと言う事は私にとっても敵に等しい存在です。あの喪黒は絶対に許すわけにはいかない…」
「ああ、あの検事です。俺の所もあの検事に協力しています」
と拳志郎が言う。
「という事は検事と貴方は同じ目的なのですね」
「ええ、その通りです。俺はこれからゼーラへ向かいます」
「そうですか…。拳志郎さん、改めてお願いします。ゼーラに向かうのであれば是非あの CP9 の悪行を暴いて下さい。私達は今、久利生検事にも

あの会社の実態を調べてもらってます。実は CP9 からの『和解』話として 1 億円を払う代わりに訴訟を取り下げて全て黙ってくれという話が来ていました。ですけど、私達は全員で断りました」

と魔美は拳志郎に懇願すると

「ええ、勿論です。俺自身の周りでも不穏な動きがあります。恩師も巻き込まれました」

「確か貴方は塔和大の…」

「ええ、それに今まで得た情報によればサザンクロスの院長であるシンにも監視の目がついています。あの病院は『元斗会』が経営しておりますから」

「ではあの病院にもまだ良心がある方がおられるのですね」

「ええ、ですから安心して下さい。俺は必ずゼーラで決定的証拠を掴み、奴らの悪事を暴いて然るべき法の下での裁きを受けさせてみせます」と彼は高畑夫妻に改めて誓った。

その頃、ゼーラでは…

「CP9 よ、きれいな宍道湖を返してくれ!」

「命はプライスレス、エニエスなんて屁のカツパ」

CP9 製薬本社工場前…。その前に座り込みを続ける環境 NGO 団体の『ゲッコーステイト』。本社工場からの排水によって宍道湖が汚染され、『クラクラ病』なる公害病が蔓延していた。リーダーのホランド・ノヴァクを中心に祖父アクセルが病に罹ってしまっているレントン、エウレカ夫妻と三人の養子の他、数百名が座り込みをしている。午後には羽丘芽美、飛鳥大貴がクラスメイトを率いて加わる予定だ。更には…

「スパンダー—ムツ!!出て来—いつ!!!」

と彼らの中から一際大声で叫ぶ者がいる。そう、スパンダムに詰め寄った拳句、殴って辞職したあのモンキー・D・ルフィである。その彼の声に連呼するかのよう

「スパンダー—ムツ!!出て来—いつ!!!」

「出てきて被害者に謝罪しろ—いつ!!!」

とデモに参加している全員が叫ぶ。その光景をスパンダム・グロリア社長は閉口した表情でマジックミラーから見ていた。しかも彼らの機関誌『ray = out』に CP9 の悪事まで暴露するおまけ付きだったからクレームが殺到する始末だ。

「ウザい NGO 連中め!!まさかあの麦わら帽子の小僧が漫画家やガキどもまで招くとは…!!!」

「しかも奴等の機関誌に『ゴードム』や『エニエス』の製造工程まで書かれましたからな」

「ええ—い暢気な事言っていないで何とかしろルッチ!!」

「ご心配なく、すでにクマドリにゼーラ王室議会と奴らを政治的に支援する桑田福助の買収工作を始めさせました」

「さすがだ。それと、薬膳製薬乗っ取りに動け」

「はい、お任せを」

「スチュアート博士の接待はどうか。先ほどお会いしたのがなかなかの人物で安心した」

「順調のようです。ブルーノと氷室が動いています」

「そうか、それにしても教授の子供はいけ好かなかったな。俺がやさしく挨拶してやったというのに」

「仕方がありますまい、クマドリのせいで怯えてしまってますからな。奴には大目玉は食わせておきましたので」

「あ、という訳で～あなた様に～この～CP9 の株式を～あ、譲渡させて～あ、いただきたい～。あ、その代わりに～ゲッコーステイトから～あ、撤退を～お願いしたい～」

「おい、何を言っているんだ。お前、そんな暇あるんだったらまずはクラクラ病対策をしっかりと執れよ」

鋭い目つきで鼻ひげを蓄えた青年が鋭く言い返す。

「あ、我々は～きっちりい～あ、環境対策を～取って～あ、おります～」

「おい、歌舞伎男。お前何考えているんだ」

男はクマドリをにらみつけた。その眼孔に震え上がるクマドリ。

「お前ら CP9 が売っているエニエス、ゴードムはみんなとんでもない薬害ばかり招いている。お前らに対する市場の信頼はどんどん低下している。つばさ製薬のシェアがどんどん上がるのはそのお前らの落とした信頼に対して副作用情報がちよっとでもあつたらすぐにインターネットで公表して警告するなどしていい意味で臆病だから信頼を得られるんだ。お前の所の社長に言っておけ、『賄賂を贈る暇があつたら薬害対策でもしとけ』とな」

そういつて青年は事務所から引っ込んでいく。がっかりしてクマドリは帰っていく。

「桑田君、VTR 取ったわよ」

「オーケー、さすが市丸だ」

桑田といわれた青年は美女に微笑む。そこへ電話が入ってきた。

「桑田先生、ゼーラ議会のセバスチャン・パルパティーン議長からお電話です」

「分かった、出よう。もしもし、桑田です」

「相変わらずのようだな、君は」

「パルパティーン先生こそ、ご多忙のようで…」

「私はゼーラに企業を誘致する為自ら対策部長を務めているがね。先ほど CP9 から変な話があつたが、君も関わっているというので今話を保留にして聞いてみたいのだが」

「パルパティーン先生、要するに宍道湖の公害問題の口封じですよ。俺の所にも賄賂の話ですよ」

「ああ…。助かった。実はカクという男が昨日訪れて私に今の工場の規模を拡大したいと申し出ていた。だが、その土地はつばさ製薬に薬害が原因で経営支援を求めている薬膳製薬のものだ。あまりにもあからさまなのでルーク君が話を保留にして、アナキン君が我が情報収集機関であるシスに根回しして調べてもらっているがね。スカイウォーカー親子の指摘がなければ私は乗り気になっていたがね」

『シス』はパルパティーンが組織した議会直属の情報機関である。

「実はその賄賂を贈ろうとしたところ、盗撮したんです」

「何!?すぐにそのビデオをダビングして持ってきてくれないか!私もムスカ首相に連絡を入れよう、それと警察や連合共和国のスタッフにも来てもらおう」

このパルパティーン議長と話をしているのは日本連合共和国下院議員・進歩党党首の桑田福助である。彼の政治的信条は中道的左派政策だが、決して強引な手は用いない。そのため、ゼーラ議会で多数派を占めるのだ。

「ビデオはどれぐらいダビングしましょうか」

「そうだな、我々は CD-R で構わない」

その三日後…。

「何ッ、あの工作がばれてクマドリが逮捕されたと!?」
スパンダムはルッチから話を聞いていた。
「薬膳製薬はすでに問題のあった解熱剤を改良したサノタール α を完成させて薬害の問題を解決したようです。そこへあのつばさ製薬が過半数の株式を TOB で取得する事を決めたそうです」
「シェア拡大どころか、逆に手を打たれるとは…!!」
「どうされたのです。そんなに慌てて」
とたまたま事業の事で話し合いに来ていたマードック社長、マーク・ロンが尋ねる。
「ロン社長、実はウザい NGO についてしかるべく動くよう要請した工作が失敗に終わってしましましてね」
「まずいですね…。そのままではあなたに警察の手が及びます」
「困っているのはその事です。ロン社長、あなたの知恵を借りたいのですが」
「簡単です、クマドリ部長一人の責任にしまえばいい。この前のトップセールスの失敗の責任を彼になすりつけてしまえばいいのです」
「なるほどね…。では、文書の偽造をお願いしたいのですが」
「フフフ、私も貸しはいくらでも作っておいた方が得ですからねえ」

「そうか、あの野郎全てクマドリに押し付けたのか」
「はい課長、買収工作が失敗してその責任回避の為に彼一人になすりつけたそうです」
庶務課の部屋で部下のタシギから顛末を聞かされたスモーカーはため息をついた。
「フン、そんな事してもこうなるのがオチだとは分らなかったようだな」
「そうですね、あのルフィという社員が激昂して辞めていった時点でこうなる事が誰の目でも明らかでしたのに」
「タシギ、トップってもんは眼鏡掛けずに喋ってるお前と同じようなもんで周りや足元が見えんもんさ」
「課長、分かりますけど私で例えて言わなくてもいいじゃないですか」
とタシギが文句を言うと
「ねえお姉さん、ここの社長さんって悪い奴なの？」
とロキ・スチュアート Jr. が尋ねる、庶務課の二人はスパンダムから彼の世話を押し付けられていたのである。
「ああそうだ、坊主。ここの社長はとんでもねえ奴だよ」
とスモーカーがタシギに代わって答える。
「ふ～ん、そっか悪い奴なんだ」
「ねえ、それがどうかしたの?ボク」
「パパがね、この国に悪い奴がいるからソイツをやっつけるって言ってたんだ。ここに来る前に」
「!?確か坊主の父親はウィルス研究の博士じゃなかったのか?」
「うん、そうだよ。でもパパは悪い奴をやっつけるヒーローなんだよ」
「どういう事でしょうか?課長」
「分からねえな…もしかして裏の顔があるんじゃないか?俺達いや馬鹿上司共すら知らねえ顔がよ…」
このスモーカーの予想は当たっていた。前にも説明したがロキ・スチュアートは国連直属の暗殺部隊『ミキストリ』のメンバーでもあったのだ。
「課長、ロキ博士の事調べてみましょうか?」
「いや待て、そっとしておけ。案外味方かもしれんぞ、それにあの博士は何らかの組織のスパイかもしれんからな」
「分かりました」
この時のスモーカーの判断は正しかった、もしロキの事を調べようものなら彼は暗殺の対象になっていた筈だったのだから…。

クマドリが逮捕される二日前に遡る…
「これは本当に酷い…」
ゼーラに入った拳志郎は CP9 によって汚染された宍道湖を眺めていた。湖の現状は地方新聞やニュースなどで知っていたが実際に目で確かめると見るとヘドロの臭いや濁った水をはっきりと感じた。現に目の前の湖面に死んだ奇形の魚が浮いていた。
「いや、本当に酷いものですよ、これじゃルボも書けやしない」
不意に横から声がした、拳志郎が声のする方を向くとルバンシカ帽を被った優男が立っていた。
「貴方は?」
と拳志郎が尋ねると
「僕ですか?僕はルボライターをやっております浅見と申します」
と男は答えた。
「浅見?もしかして数々の殺人事件の捜査に協力しているという浅見光彦さんでは?」
「ええまあ…協力というよりは巻き込まれていると言った方が正解ですけどね、ハハハハ…。ところで貴方は?」
と『浅見』と名乗った男が尋ねる。
「失礼、俺はこういう者です」
と拳志郎は名刺を取り出して浅見と交換する。
「ああ、貴方があの…。僕も読んでますよ、『週刊北斗』を。このゼーラにある CP9 の事で調べてらっしゃるそうで」
「ええ、ここへ来たのもその取材の為なのです」
「そうですか…。僕は今回もここへ来てますけど湖がこんな酷い状態になっているのを見たのは初めてですよ」
「ええ、その汚水のせいで公害病が発生しているとか」
「『クラクラ病』の事です、僕も知っています。実は松江駅を降りた時にこんな機関誌を手に入れましてね」
と浅見は手にしていた冊子を拳志郎に見せる。
「ほう、『ray=out』と言うんですか?」
「ええ、『ゲッコーステイト』って団体をご存知ですか?彼らがこの機関誌を発行しているんですよ。湖がこうなったのも薬の製造過程に問題があるそうで」
浅見の話聞きながら拳志郎はページを捲る、すると
「!?」
彼はあるページに目を留めた。そこには浅見が言った通り、薬の製造工程が書かれていたがその情報提供者に聞き覚えのある名前があったからだだった。
「浅見さん、彼は」
「ああ、その人ですか、彼は元 CP9 の MR だったそうですが今は発行元の団体に参加しておりますよ」
「『ゲッコーステイト』に!?」

「ええ、彼がどうかしましたか？」
「実はここへ来る前に科学アカデミアで取材をしまして、その時に彼を紹介されたんですよ。俺は彼にも会うつもりなんです」
「なるほど、そういえば彼らの活動拠点がこの松江にあると地元の人が言っていましたね」
「なら探してみます。浅見さん、有難うございます。俺はこれで失礼します」
拳志郎は機関誌を浅見に返す。
「そうですか、僕もしばらくはこの松江にいます。出来たらまたお会いしましょう」
こうして二人は宍道湖を後にして別れた。拳志郎の心には CP9 への静かな怒りが湧いていた。

その日の夕方…

「ここか…」
拳志郎は松江のとある教会に来ていた。地元の人々に尋ねてここが『ゲッコーステイト』の拠点だと教えられて来たのだ。彼は教会の中に入る。
「すみません、懺悔でしたら今日はもう時間ですので」
と入ってきた拳志郎に金髪で髻みたいな髪型をした牧師が言う
「いや、この教会からいい月が見られると聞いたんですがね」
と拳志郎は意味ありげな言葉を返す。
「?どういう意味です?」
「ここは『ゲッコーステイト』という団体が拠点としている所と聞いたんですけどね」
「貴方、一体どなたです?」
牧師は笑顔を取り繕いながらも警戒しながら尋ねる。
「俺はこういう者ですが」
と拳志郎は名刺を牧師に渡す。
「五車星出版社記者…、霞拳志郎?はて?どっかで聞いたような…」
と牧師が考え込みだしたところへ
「おう、ヴァッシュ!今帰ったで。ん?そちらさん、誰や?」
とどこかへ出かけていたもう一人の牧師が尋ねる。
「ニコラスか、こういう人らしいんだけど…」
と『ヴァッシュ』と呼ばれた牧師が『ニコラス』と呼んだ牧師に拳志郎の名刺を見せる、すると
「な!なんやと!?おい、CP9 の薬害疑惑追ってる男やないか!?!この男!!」
「ええっ!!こ、この人が!?!」
「おい、この男がホランドが会いたがっていたという?」
とニコラスと共に戻ってきたアフロヘアーの黒人がニコラスに尋ねる。
「ああそうや、マシュー!この男や!」
「何だって!?こうしちゃいられん!急いで連絡しなきゃ!!」
と『マシュー』という名の男は携帯を取り出してホランドに掛けた。
「もしもし、ホランドか!?!お前が会いたがっていた霞拳志郎が教会に来てんだよ!!…ああマジもマジ!!大マジだっ!!早く戻ってきてくれよ!!」

「まさか、アンタが来てくれるとは思わなかったぜ」
「俺もアンタにいろいろと訊きたい事があった」
その夜、福助の実家である小さな料亭『こころ屋』にゲッコーステイトのメンバーと拳志郎、話を聞きつけてきた福助達進歩党のメンバーが集まっていた。ちなみに拳志郎はパーティの参加費用も払っていた。
「ごめんなさいね、こんなものしか出せなくて」
「いや、大丈夫ですよ寛子さん」
福助の母親である寛子に拳志郎は微笑む。福助の父である琢郎は同世代と比較しても 180cm の長身である。福助の身長が 205cm もあるのは父親譲りなのだろう。
「さて、早速だが」
「おう、訊きたい事があるって言ってたな。いいぜ、何でも訊いてくれ」
「アンタ達の機関誌を読ませてもらった。この情報提供者がアンタ達の中にいるそうだが」
「ああ、ルフィの事ね」
とホランドの妻であるタルホが答える。それに続いて
「ん?ふぁんはいっはか?」
がつがつと食事を取り、口いっぱい物に詰め込んだルフィが言う。
「ちょっと!汚いわねえ、食べ終わってから喋んなさいよ!!」
「ふああ、ふぁりい」
とタルホから注意されたルフィは口の中のものを飲み込む。
「彼がそうか?」
「ああ、知ってると思うが奴は元 CP9 の社員だったんだ。何でも恩ある人物がクビにされた事に怒ってスパンダムをぶん殴って辞めたんだと」
「その恩ある人物とはガジャ博士の事ではないか」
と拳志郎がガジャの名を口にした途端、
「何——っ!?!ガジャのおっさんを知ってんのか!?!」
とルフィが驚いて大声をあげた。
「ああ、彼は今オーブのアカデミア総合研究所で新薬の開発をしている。俺はそこで彼にあって取材した。その時にお前を紹介された」
「そっかあ、おっさんはアカデミアにいるのかあ…よかったあ」
「ガジャ博士から連絡が来てなかったのか?」
と拳志郎は彼に尋ねる。すると
「それがなあ、こいつホンマに不器用なんや。携帯さえろくに扱えん有様やで」
とニコラスが言う。
「…そうか、まあそれはいいとしてルフィ、お前に博士から伝言がある、『わしの事は心配するな、今アカデミアで『ゴーレム』の安全性を更に高める研究をしている、決して軽率妄動するな』と言っていた」
と拳志郎はガジャからの伝言をルフィに伝えると
「そっかあ…。おっさん、そんな事言ってたのかあ…。よーし!!おっさんがアカデミアで研究してんなら俺も心置きなくやれるぞーっ!意地でもスパンダ

ムの野郎をケチョンケチョンにしてやる!!」

と意気込んで言った。

「アンタ…言われた事が分かってんの?」

「ああ、分かってるぜタルホ」

「ホントに分かってんのかしら…」

ルフィの意気込みにタルホが呆れる。

「話を交えさせてもらおう、アンタ達はこのゼーラで活動しているから詳しい事を知ってる筈だが『クラクラ病』についての現状を教えてもらいたい」

すると福助が

「ああ、それなら石橋先生に訊くといい。それとホランド、お前のところのサーストン夫妻の話も聞かせてやったら」

と言った。

「その石橋先生というのは?」

「ヴァルハラ病院をご存知でしょう、その病院が松江にもあるんですよ、そこで働いている医師の一人がその石橋友也という人なんです」

「ついでに言っちゃえば公害病の患者の一人が今言ったサーストン夫妻の爺さんってわけさ。おい、レントン!この記者がお前の爺さんの事を聞きたいってさ。ついでに明日、爺さんを診てもらってる石橋先生を紹介してやれ!」

とホランドはメンバーの一人であるレントンに声を掛ける。

「分かったよ、ホランド」

「彼が?」

「ああ、あいつと女房のエウレカは十年前まで俺と共に戦闘機部隊にいてな、俺の部下だったんだ。俺はあのテロ戦争後に軍をやめてこの『ゲッコーステイト』をタルホ達と共に始めたんだが五年前にこのゼーラで講演会をやっていた時に宍道湖の実状を知らされてな、ここで活動するって時にあいつ等と再開して引き込んだのさ。あいつも爺さんが宍道湖の蜆食べて病気になるっちゃったんで参加する気になったってわけさ」

「そういう事か…」

「病院には僕も行きますよ、病院の一室で礼拝を行ってますから」

とヴァッシュが言うと

「それがいい、僕は CP9 の贈賄嫌疑を固めて一網打尽にするつもりだ」

と福助が言う。

「桑田さん、その贈賄嫌疑というのは?」

と拳志郎が質すと

「拳志郎さん、これはまだ調査中ですので極秘事項ですが貴方を信頼してお話いたします。実は一昨日、CP9 が僕とゼーラ帝国議会を買収しようとしたんです。実際、僕の所にも広報部長とやらが来ましてね。尤も僕は断ったばかりかその場面を抑えておきましたけど」

「何だと!?けど奴等ならやりかねんな」

と顔を顰めながら言うホランド。拳志郎は静かに酒を飲みながら聞いている。

「とにかくだ、拳志郎さんよ。アンタには全面的に協力するぜ」

「ああ、桑田さんもよろしく頼む」

「勿論です」

こうして、三者は CP9 の暴挙阻止で一致団結する事になった。

5

クマドリ逮捕の当日…

「お前達の出る幕じゃない!余計な事に首を突っ込むな!!これは命令だ、分かったな!!?」

「…はい」

ここはゼーラ帝国内にあるベルナルデリ保険会社。この社員であるメルル・ストライブと後輩のミリィ・トンブソンは上司から頭ごなしに叱責されていた。彼女達は入院保険担当なのだが最近『クラクラ病』患者の入院保険の支出が多い事に気づき、それが CP9 の製薬工場からの汚水が原因らしい事を突き止めて調査の許可を申請したのだ。しかし結果は前述の通り、叱責付きで却下されてしまった。

「先輩、駄目でしたね」

と机に戻りながらミリィが小声でメルルに話しかける。

「思った通りね」

「何がですか?」

「他の社員達から聞いたけどあの、CP9 の株を購入しているらしいわよ」

「そうなんですか!?じゃあ…」

「ええ、私達に嗅ぎまわられるとヤバイと思ってるのよ。あの CP9 には黒い噂が絶えないから、もし私達がそれを明るみに出せば株は暴落する、あの人のにとっては大損よ」

「でも…。それじゃこのまま黙って引き下がるんですか?会社潰れちゃいますよ」

とミリィが不安を口にすると

「誰が引き下がるもんですか、こうなったら極秘で調べるのよ。私達だけで」

とメルルは決意を込めた顔をして小声で言う。

「いいんですか先輩!?そんな事して」

「何言ってるんのミリィ、ただでさえ CP9 が引き起こす公害病で被害者が出るのよ。それが廻って私達の会社に損害与えてるんだから、会社潰したくないでしょ」

「はい先輩」

「だったらやるわよ」

こうして二人は独自にそれも会社には極秘裏に調査を始めた。

同じ頃、拳志郎は『ゲッコーステイト』メンバーのサーストン夫妻と牧師のヴァッシュ・ザ・スタンピードと共にヴァルハラ松江病院に来ていた。ここ入院しているサーストン夫妻の祖父アクセルの見舞いも兼ねて、担当医師である石橋友也に話を聞くために訪れたのだった。

「祖父ちゃん、具合はどうだ?」

「おお…レントンか」

見舞いに来た孫の声にアクセルはまだ病弱な顔で笑顔を見せる。そこへ

「お早うございます、アクセルさん。具合はいかがですか?」

と一人の医師が病室に入ってきた、彼こそが石橋友也である。

「お早うございます、先生」

「ああ、お孫さんが来てらっしゃいましたか」
「先生、顔色悪いですね」
と石橋の顔色に気づいたエウレカが言う。
「ええ、アクセルさんのような患者さん達の対応に追われて…」
と言いながら友也がふらつく。
「先生!」
「いや、申し訳ない。大丈夫です、少しは眠っておりますから」
「しかしその顔からはよく眠れていないようですが」
と拳志郎が彼を支えながら言う。
「貴方は?…もしやヴァッシュさんが仰っていた」
「そうだよ先生、霞拳志郎さんだ。CP9 の公害について取材に来たんだ」
「そうか、貴方の事はヴァッシュさんから聞きました。申し訳ありませんが昼まで待っていただけませんか。患者さん達を診なければなりませんので」
すると
「それでしたら私や他の先生方がやるわ。貴方は少し休んだ方がいい」
と一人の看護師が声を掛ける。彼女の名は石橋めぐみ、友也の妻で介護福祉士を兼任している。
「ありがとう、しかし…」
「何言ってるの、昨日も過労で倒れたのにその状態で患者さん診れると思ってるの!? 貴方は拳志郎さんの取材に応じながら体を休めた方がいいわ」
するとアクセルも
「先生…、めぐみさんの言う通りじゃわ、わし等の事より先生自身が倒れられたらわし等を診てくれる方がいなくなってしまう。悪い事は言わん、休まれた方が良いですぞ」
と友也に休養を促す。
「すみません、患者である貴方にまで気を遣わせてしまって…分かりました。では拳志郎さん、取材の方を受けさせていただきますか」
「先生、無理はなさらないでと言われた筈では」
「ななに、取材なら大丈夫ですよ。患者さんのカルテをお見せいたしますのでどうぞ診察室まで」
拳志郎は友也と連れ立って彼の診察室に向かった。

「これは酷いものです」
「ええ、宍道湖で取れる蜆からの有害物質を調べてみてかなりの濃度です」
診察室で患者のカルテを見た拳志郎は顔を顰めた。
「やはり、CP9 がこのゼーラに進出してきてからですか」
「ええ、このクラクラ病の原因は患者さん達の血液を採取して検査したところ、血中からジエチレングリコールが検出されたんです」
「ジエチレングリコール…」
「これは元々、工業用溶剤や不凍液、それに燃料添加物やブレーキ液に使われるものですが、甘みがあるんです」
「すると、あの会社は薬品に甘味料として混入している…」
「分かりませんが恐らく製造過程で出てくるのか、工場の機械で使われているのが混入されているのか…」
(ジエチレングリコールに関しては愛知県衛生研究所 2006.11/28 付けより引用)
「……」
拳志郎は絶句した。前に CP9 に直接取材した際、スパンダムに薬品製造工場内の取材を迫ったが拒絶された事があった。今回、患者のカルテで分かった事で製造工場の杜撰な実態の一部が見えてきたからだった。無論、彼はその事が取材を拒否された理由の一つだと思っている。
「あの…、どうかされましたか?」
拳志郎が考えている顔をしたので友也が尋ねると
「先生、CP9 が最近開発して販売した『ゴードム』の事をご存知でしょう」
と拳志郎が言う。
「ええ、副作用が強いというニュースは聞いています。現にあれで重態に陥った患者もいたとか」
「そうです、確かあれの副作用は…」
「動悸・眩暈・発疹が主ですけど最悪の場合、心肺機能が破壊され死亡するという情報が入っています。現に東京のヴァルハラで研究班が動物実験したところ、そういう結果が出たところにもデータが送られてきております」
と友也はその実験結果が書かれたデータをパソコンで出して拳志郎に見せた。
「…なるほど、とんでもない代物だ」
「この情報もお役に立てるようでしたら後でお渡しいたします」
「ありがとうございます、助かります」
「もしかして『ゴードム』にジエチレングリコールが混入されていると考えてますか?」
「ええ、まあ」
「その可能性がないとは言えませんがその関係も調べてみる必要がありますね」
(できる事なら工場関係者や研究員に直接当たる事ができればいいのだが…)
拳志郎はデータを見ながらそう考えた。

同じ頃、あのベルナルデリ保険会社員の二人、メルルとミリィがヴァルハラにいたのは全くの偶然であった。彼女達も患者達から直接被害状況を聞き出していたのだ。
「ひどいものです、先輩」
「ええ、実際に会ってみて事態がこうも悪いとは思わなかったわ」
「でもこれだけじゃあ…」
「足りないわね、こうなったら直接工場か研究所を当たりましょ。それが CP9 に抗議している『ゲッコーステイト』ね」
メルルもまた拳志郎と同じ事を考えていた。
「で、どこから探ります?」
「そうね…」
と彼女が考えた時である、一人の患者が医師や看護師に付き添われながら担架で運ばれてきた。
(あら、また公害病の患者かしら?)

と彼女がそう思いながら彼らを見ていると
「先生!肋骨が何本か折れてます!!」
「出血も多いな、よくあんな事故で助かったな」
「とりあえず輸血の用意はしておきます!」
「ああ、血液型を調べておいてくれ、術前処置もだ」
「はい!!」
(事故?)
「先輩、あの人…」
「ええ、交通事故かしら?」
と彼女が話していると
「おい、ネロの奴は…」
「ああ、ありゃ間違いない。目をつけられたな」
「俺も心配だったんだ、氷室が工場を見に行ってた時にアイツ何かコソコソとやってたからな。昼前に工場の外に出た途端、轢き逃げされたからな」

と後ろで患者の付き添いらしい二人の男が話していた。
(轢き逃げですって!?)
二人の男の話し声にメルルは驚き
「すみません、今の話はどういう事ですか!?!」
と彼らに尋ねる。
「貴方は?」
「申し送れました、私はこういうものです」
とメルルは彼らに名刺を渡す。
「保険会社の人が何か?」
「先ほどの人、何かを知って狙われたと聞きましたが…」
「……」
「詳しく教えて頂きたいんです、あの方とあなた方は CP…」
とメルルが続きを言おうとした途端、
「シッ!声大きい」
と男の一人が慌てて彼女を口に手で蓋をし
「ああ、確かに俺達はその研究員だ。運ばれていった奴も製薬工場の関係者さ」
と小声で答える。
「…やはり」
「すまないけどこれ以上は言えない。第一、調べようとしている君達も危険だ」
「いえ、私達は会社を存続させたくて調べているんです。引き下がるわけには」
「しかし…」
「お願いします、話を聞かせて下さい。これは私達自身の問題でもあるんです」
メルルとミリィの懇願に二人の男は根負けし
「…分かった、ただこの病院では話せない。俺達が指定する場所でないか?」
「いいでしょう、分かりました」
「それと…」
「ええ、決して口外いたしません。それは誓ってお約束いたします」
「ありがとう、それじゃ彼の手術が終わった後でいいか」
「ええ、かまいません」
話はまとまり、四人は手術室前まで向かう。男の一人は途中で病院を抜け出し、人目のつかない所で携帯を掛ける。
「もしもし、秋月です。例のマークしていた男が事故に遭いました…ええ、明らかに奴等の仕業です。それと…」

「…という訳でその保険会社の女性社員も奴等の周りを嗅ぎ始めたそう。それと例の男だが引き続き狙われる可能性が高い、それとなく警備を増やしておこう」

「了解しました」
ここは GIN ゼーラ支部、彼らの諜報チーム『ゴルゴム』から連絡を受けた支部長、和倉英輔は部下達に通達した。
「了解しました、しかしあの件はいかが致しますか?」
「ああ、桑田とゼーラ議会に対するクマドリとやらの買収工作か」
「はい、CP9 は奴が単独で行ったと逃げ口上を言ってますが」
「私も調べているが、この前あのマードックのロンがスバンダムと面会していたようだ。その後にクマドリがトップセールスの失敗の責任を問われて解雇されたそう」
「腐敗は根深い…。困ったよな…」
ため息をつく青年。
「岩瀬…。こればかりはどうにもなるまいよ。この前の株主総会で公害問題を追及しようとして鶴野先生達がおそわれて怪我をしただろう、金銭が動く以上、欲も同時に動くものさ。しかも、ムスカ首相が CP9 本社工場の稼働を一ヶ月停止させようとしたがゼーラ厚生省で反対があって頓挫したそう」

「官僚組織そのものが腐敗しているのね…」
「単純王タケトみたいな人間は早々いないのだ」
「何だと、サルサ!」
「喧嘩はやめろとにかく、今俺達がやるべき事は CP9 の悪事を止める事じゃないか」
岩瀬健人と浅黒い青年に割ってはいる女。彼女は北原美也といい、健人の婚約者に当たる人物である。葛城慶次郎(通称・サルサ)は舌を出して笑っている。

「官僚組織の腐敗については俺の方から本部のメンバーに連絡を入れた」
「警察も上部から圧力をかけられている。苦々しい」
「だろうな、我々も彼らに協力してやりたいがあくまで権力濫用を防ぐのが我々の仕事だ。憎まれるのは当然だ」
和倉は傍らの写真立てを見ながら言う、そこには数人の集合写真が飾られていた。この写真は福助の事務所にかかっている写真と同じで彼と福

助、それに高校時代の同級生で福助の愛妻の絵里、そして二人の膝元に座る長男の優実、長女の直を中心にヴァルハラ松江院長で福助の叔父である西城カズヤ、麻純夫人と一人息子の一也、福助の叔母で産婦人科医の磯永ケイ、福助の叔父の西城一昭、スベトニア夫人、研修医で一人息子のイワン、福助の父である琢郎、福助の妹夫婦である金田一（はじめ）・美雪、工藤新一・蘭がうつっている。尚、金田一・工藤夫妻はGINゼーラ支部の一員であり、優秀な頭脳を持つ為『ゼーラのダブルブレイン』とも呼ばれ、警察軍特別科学捜査班にいる脳科学者、九十九龍平も一目置いている存在だ。健人の兄で警察官出身の査察官である寿文が厳しい表情で聞く。

「部長、ゼーラ王室は奴等をどう見ているのでしょうか？」

「桑田によると王室でもやっかいな存在として頭を抱えているらしい。先日、桑田と共にゼーラ軍元帥のリヒテル氏にも会ったが彼の所にも来たそうだ」

「買収ですか!？」

「ああ。尤もリヒテル氏は清廉な人だから追い返したそうだがね、どうも部下に奴等の毒が回っているのですその対策に苦心しているそうだ」

「毒といいますと」

「奴等の株だ、『今が値上がりチャンス』とかほざいて買わせているらしい」

和倉は苦虫を噛み潰したような顔をしながら言った。

その日の夕方…

メルルとミリィは例の男達に指定されたレストラン『パラティエ・ハボン』に男達と共に来ていた。店の片隅の席で食事を囲みながら四人は話している。

「すると貴方がたは内部告発を検討しているのですね」

「ああ、俺達は彼その他、庶務課の人物とも親しい。彼らと共にあの会社の不正を暴こうと証拠を集め回っている」

「本来ならその証拠の一部を見せてもいいが残念ながら手元にはない。しかし、実態は打ち明けれるから…」

と男達は声を潜めて彼女達に話す。

「先輩」

「ええ、驚いたわ。ジエチレングリコールが原因だなんて…」

彼女達も小声で驚く。

「そこまで杜撰なんですか」

「それだけじゃない、『エニエス』と『ゴードム』の事は知っているだろう」

「ええ、あの二つにも不正が絡んでいるとか」

「その通りだ、特に『ゴードム』に関しては前任のガジャ博士があればほど市場に出す事を時期尚早だと反対していたにも関わらず、データを盗ませて販売したそうだ」

「先輩、そういえば『ゴードム』の副作用での入院保険の支出も多かったですよ」

「思い出したわ、『クラクラ病』の事で忙殺されていたけれど…道理で」

とそこへ

「クソお待たせいたしました。本日のメインディッシュでございます」

とこの店のオーナーシェフ、サンジ自らが料理を運んできた。この店はサンジ・ナミ夫婦二人でやっている為、ウェイターはいない。

「ああ、どうも」

「こちらはクソお下げしてよろしいですか？」

「え、ええ、お願いします」

メルルはサンジの笑顔に少し引く。

「ああ、当店は女性のお客様には半額とさせていただいてますので」

「え!?本当ですか」

とミリィが喜ぶ。が、

「アホか、アంతは!!勝手に半額にするな!!すみません、お客様。彼、冗談が好きなのでして」

と後ろからナミが夫にツッコミを入れながら訂正する。

「は、はあ…」

「ナミすわ〜ん、いいじゃないか〜」

「ダメに決まってるでしょ!!さっさと厨房に戻る!!」

「は〜い」

「大変失礼し致しました、ではごゆっくり」

とナミはそう言々とサンジを促して去っていった。

「先輩、面白い人ですね。ここのシェフさんって」

「そ、そうかしら…私は好きになれないわねえ…」

メルルは引きつった顔になる。尚、彼女達は男達の名が南光太郎と秋月信彦といい、CP9 製薬研究所の職員であるという事と事故に遭い、重傷を負った男の名がネロで、同社製薬工場の職員であるという事を知った。だが南と秋月にはもう一つの顔があった、それは二人がああ GIN ゼーラ支部の諜報チーム『ゴルゴム』の一員でもあったのだ。無論、彼らはこの時メルルとミリィには表向きの事しか喋ってなかった。

夜、ゼーラのホテルでは…

「悪かったわね、付き合ってもらって…」

「気にする事じゃない。君が我々の任務を達成させる事こそがあの人への弔いにもなるからだ」

ゼクス・マーキスとスメラギ・李・ノリエガはバーでバーボンを飲んでた。彼女の父親であるラウルはオリエンタル製薬の社長だった人物だった。がスパンダムを買収提案を断った為に逆恨みされ、債権を買収取られた上に何者かによって解熱剤に毒を混入されて会社の経営が悪化した事が相重なって会社は破産させられ、会社の資産は全て奪われたあげくラウルは追い出され、妻はそのショックで自殺に追いやられたのだった。

絶望していたスメラギを救ったのはトレーズ・クシュリナーダだった。彼女はアメリカに留学中に母親の自殺を知って絶望したがトレーズは自身の資産を活用して学業を支援し、ソレスタルビーイングに彼女を招いた。彼女の周りには CP9 が彼女の存在に危機感を抱いて行動を逐一監視していた。そこでゼクスはスメラギと相談の上彼女をおとりにして水面下で壬生国と CP9、リブゲートの癒着の関係を調べ始めたのだった。

「個人的な怨みより、任務を全うする事だ。君が引きつけ役を演じてくれているのには助かる」

「かまわないわ、奴等も私の事を煙たがっている筈だから」

その時である、

「リーサ・九条様でいらっしゃいますか？」

とバーテンダーが彼女に声を掛ける。『リーサ・九条』とは彼女が使っている偽名だ。

「ええ、そうですけど」

「あちらの方からです」
とバーテンダーは一杯のカクテルを彼女の前に置き、相手先に顔を向ける。スメラギとゼクスがその方向に顔を向けた先には色白の白人男性がブランデーを飲んでいた。
「お前はロキ・スチュアート!何をしている!？」
「ゼクス・マーキス、久しぶりだな…。今は殺意などない」
そう、スメラギにカクテルを差し入れたのはロキ・スチュアートだった。彼も二人と同じホテルに泊まっていたのだ。
「どういう事かしら?それにこれは何のつもり？」
「フッ、君達が私を嫌うのは無理もないがね。安心したまえ、それにそのカクテルはお近づきの印さ」
「わざわざどうも。それで『死神』が私達に何の用かしら？」
とスメラギは皮肉な表情で彼に尋ねる。彼女の所属する組織『ソレスタルビーイング』とロキの所属する暗殺部隊『ミキストリ』は反目しあっているのだ。
「おいおい、二人ともそんな顔をしないでくれ。我らミキストリも独自に動いている、任務内容までは言えないが一つ有力な情報を君達に公開しようと思ってね」
「ほう、聞かせてもらおうではないか」
「私は独自にCP9の連中を調べてみた。その結果、今回のターゲットから外す事にした」
「あら、どういふ風の吹き回しかしら？」
「簡単な事だ、奴等は殺すにも値しない輩だという事だ」
「奴等はお前達にも嫌われたという事か、皮肉なものだな」
「そういう事だ」
と彼らが話しているところへ
「いらっしやいませ」
「ロキ様、ここにいらっしやいましたか。!!お前達は」
店に入ってきたロキの執事、闇野竜介がゼクスとスメラギを見るなり身構える。
「闇野君、やめたまえ。ここで争うなど意味もないし店員に迷惑だぞ」
「は…はい」
「Jr.はもう寝たのかね？」
「はい、坊ちやまはもう眠っておられます」
「ご苦労、ところで息子達からは連絡は来ているのか？」
「はい…」
と言って闇野は言葉を濁す。ここから先は機密事項だからだ。因みにロキの言う『息子達』というのは名古屋郊外の屋敷にいるトリニティ三兄妹の事である。理由は彼らのコードネームが『フェンリル(ヨハン)・ミトガルズオルム(ミハエル)・ヘル(ネーナ)』であり、即ち北欧神話の神ロキの息子達だからである。
「そうか、では後で聞こう」
「という事は本来のターゲットに絞るわけ？」
とスメラギが尋ねるが
「悪いがこれ以上は言えないな。ああ、ついでながらリーサ、君に有力な情報を教えよう。既に知っているかもしれないが君の周りをCP9の連中が監視しているぞ。今日も工場関係者の一人がひき逃げ事故に遭った。恐らく何かを調べていて奴等に見つけれられたんだろう。気をつけたまえ」
とロキは答える代わりに彼女に警告した。
「それはご親切にどうも。でも生憎ね、それも既に作戦のうちよ」
「ほう、囧になるのか」
「まあ、言えるのはそれだけかしら。そうそう、ついでに」
と彼女は財布を取り出すと一万円札を取り出してカウンターに置き
「先ほどはごちそうさま、ついでに情報料がわりに貴方の飲み代も置いていくわ。ゆっくり飲んでいてちょうだい」
と言ってゼクスと共にバーを去っていった。
「ロキ様、よろしいのですか？」
「何、かまわんさ。君も飲まないか」
とロキが闇野を誘うと
「ではお付き合いさせていただきます」
と二人で飲み明かした。

6

「最近、マボロシクラブが酷い話になっているんじゃないか」
ここは東京・上野にあるゴッドフェニックス運送。
主に企業の要請で荷物をバイクで運ぶバイク便担当のジュード・アーシタが同僚のビーチャ・オーレグ、モンド・アカゲ、エル・ビアンノと話していた。
「お前の昔友達があすこに通って黄色い馬中毒になっているだろ」
「ああ、それでこの前ヴァルハラ東京に行ってきたけどもうひどい。シーツを引き裂いて『くれえ、黄色い馬をくれ』ってさ。見ていた俺が泣いてきそうになった。リィナにもその事を話したら『ひどすぎるよ』って涙目になった」
「私も知り合いの友人が黄色い馬中毒にかかっているって聞いた」
「ああ、早乙女蘭だっけ。ダンサーを目指しているという」
「ええ、ジュードの昔友達と同じよ。蘭も『私のダンス仲間までこんな事に誘う奴等を絶対許さない!』って憤ってたわ」
「分かるぜ、俺とて許せねえ」
と喋っていると
「おい、お前ら何クッ喋ってるんだ、仕事に行け!」
大声を出してきたのは上野支店副支店長のジョージ・浅倉だ。
「ゲツ!まずい、スケジュールはどこですか？」
「こっちだ、まったく仕事サボっているじゃねえ!休憩時間は過ぎてんだ!天馬とはるかとはもう出たぞ、さっさと行け!!」
「は、はい!!すみません!!」
四人は準備を済ませると慌しくバイクが置いてある駐輪場に向かう。
「まったく、ジュードのせいで怒られちゃったじゃないの!」

「おい!俺のせいだよ!?エルだって同罪じゃねえか」
「二人とも言い合ってる場合じゃねえだろ!また副店長からどやされるぞ!」
四人はそう言いながら仕事に向かった。

「ったく、あの悪ガキ共め、ちょっと目を離すとすぐこれだ」
「へへっ、扱いに苦労してるな。ジョーの兄貴」
ジョージの傍らで一人の少年が声を掛ける。彼の名は燕(つばくろ)基平、まだ小学生だがこの店で配達や簡単な事務などの手伝いをしている。
「おう、基平か。あの人にアイツ等を託されたんだが相変わらずだ」
「そうだったな、まあ兄貴達が厳しく躰けたんで少しはマシになってるけどな」
ジュー達は以前、不良まがいの悪さをしていてリィナに頼まれた拳志郎に捕まり、更正されてこのゴッドフェニックス運送に就職したのだった。
「んじゃ兄貴、俺も行くぜ」
と基平は言う。彼も今日は自転車で配達するのである。
「お前も配達だったな。ああそうだ、今日は一件だけ済ませて早く戻って来い」
「ああ、そういやあ…おっといけねえ。この先は言っちゃいけないな」
「おいおい困るぜ、そうべらべら喋られちゃあ」
「分かってるって、じゃ行ってくるぜ～」
基平はそう言うと自転車に乗って配達に出かけた。

一方、同じゴッドフェニックス運送の受付では…
「ふう…」
「どうしたの?ルー、ため息なんかついちゃって」
この店の受付を担当しているルー・ルカに同じ受付担当の木野まことが話しかける。
「あ、木野さん、ジューの事なんですけど…」
「彼、また何かやらかしたの?」
「そうじゃないんですけど…彼、この前ヴァルハラに昔友達を見舞いに行った後、憤ってましてね」
「確か、その友人って薬漬けになった…」
「ええ、『禁断症状が激しくて泣きそうになったし、病院を出たら出たでアイツをああい風にした奴をいつか警察に引っ張ってやる』って意気込んでやって…」
「彼、友達思いなところあるね」
「でも…それが暴走してまた警察にやっかいになりはしないかと心配で…」
「分かるわ、ここへ初めてきた時もまだ不良の色が出ていたからねえ…」
「その血の気の多さのままに行動しなきゃいいんですけど…」
と二人が話し合っていると受付に一人の紳士らしき中年の男が来た。
「あ、いらっしゃいませ」
二人は気づいて挨拶し、席に戻る。
「切手を五枚いただきたいんですが」
「はい、何円切手でしょうか?」
「鳳凰の絵柄が入った切手をいただきたい」
「え～80円切手になりますね」
とルーが横の戸棚から80円切手を出そうとすると
「ああ、お嬢さん。ついでながらだか…」
「はい、何か?」
「伊賀から私宛に小包を送ったと知り合いから聞いたのだからまだ届いていないのだから」
「え!?申し訳ありません。それはいつの事でしょうか?」
「一週間前に送ったと言っているのだからねその事で店長を呼んでもらえないだろうか」
「て、店長をですか!?!」
「そうだ」
(ん、もう～郵便業担当は何をしていたのよ!)
ルーは心の中で怒りながらも顔には出さず
「畏まりました、少々お待ちくださいませ」
と笑顔を繕いながらも内線を掛ける。尚、ゴッドフェニックス運送は郵便業が民営化されたので郵便業も兼ねている。
「あ、店長ですか?すみません、今お客様が参られまして伊賀からの小包が届いてないって言うんです」
『伊賀から?』
「ええ、その事で店長を呼んで欲しいと言われまして」
『伊賀からか…その客はどんな人だね?』
「はあ…中年の紳士風の人でして、来た時に80円切手五枚注文なされましたが」
『80円切手五枚…分かったすぐ行く』
「お願いします」
ルーは内線を切ると
「お客様、今店長がこちらに来られますので少々お待ちいただけますか」
と男に言う。
「そうか、なら待たせてもらおう」
男はそう言うと傍らのベンチで店長が来るのを待つ。しばらくすると奥から若い男が出てくる、彼こそこのゴッドフェニックス運送の店長、鷲尾健である。
「お待たせいたしました、伊賀の小包の件で私を呼ばれたのは」
「そうだ、私だ」
「それは大変申し訳ありません。ここでは何ですのであちらの応接室でお伺いいたしましょう」
と健は男を個室となっている応接室に連れて行っった。中に入ると健は錠を閉める。
「久しぶりだな、健」
「ご無沙汰しております、南部博士。お待ちしております」

そう、この紳士風の男こそオーブ王立大学学長、南部孝三郎である。何故、彼がここに来たのか？それはこのゴッドフェニックス運送が私設情報屋『ガッチャマン』の本部であり、南部は彼らの指令役であるからだ。だが、店員全てが『ガッチャマン』のメンバーではない。店長の健、副店長のジョー、手伝いをしている甚平、それにあの『怪談亭』でスパイ活動していたジュンと竜の五人が『ガッチャマン』のメンバーである。因みに健とジョーは南部の愛弟子でもあり、特に健は父親が南部と入魂の仲である。南部のクレームは健と話し合う為の暗号だったのだ。

「さて、私が頼んだ例の物だが…」
と南部は声を潜める。例の物とはあの江島陽介の研究室入り口に飾ってあったタペストリーの事である。彼はこれを健達に調査を依頼していたのだ。
「あれですね、一応の調べはつけました」
「一応というと？」
「まだ完全に分かったわけではないんです。結果を聞きますか？」
「うむ、報告を聞きたい」
「分かりました、全員を呼びます」
健はそう言うと言線（ごんせん）を掛ける。この言線には一定の箇所との会話では秘話装置が働くようになっている。
「ジョーか、俺だ。南部博士が来た、皆揃っているか？…そうか、甚平も戻ってきたか。なら全員で俺の部屋に来てくれ。俺も博士と共に行く」
健は話し終わると言線の番号を何回か押す。するとその傍らに壁が動き、扉が開く。そう、この部屋には隠し扉がついており、傍らの言線にパスワードを打ち込むと開くようになっている。因みにこの応接室は防音加工が施されており、隠し扉が開く音すら漏らさない。更に言えば応接室の隣が店長室であり、この隠し扉で通じているのだ。

「やあ、揃っているな」
健と共に隠し扉から店長室に入った南部は『ガッチャマン』メンバーに声を掛ける。
「お久しぶりです、博士」
「ジョーも相変わらずだな。さて調査結果を聞こう」
「甚平」
「あいよ、兄貴」
ジョーに促された甚平はノートパソコンを起動させると画面を南部に見せる。
「ふむ、これは暗号だったのか」
「はい、博士。これは古代インカ帝国で使われていた『キープ』という結縄文字を高度化させた暗号アイテムでした」
「そうか、江島君は中南米の歴史研究家だ。このような物を使った暗号を作ってタペストリーとして偽装しても誰も疑わないな」
「確か数週間前、博士のいる大学に赴任してきた人物でしたな」
「うん、学生に間では人気がある」
「変だな、それほど人気がある教授が何でこんな暗号なんか作るんだ？教授職だって高給取りだろ、博士」
と甚平が首を傾げる。
「まあな、だが私の予想では江島君には裏の顔があるような気がする」
「それなら納得がいくわい。問題は誰に宛てたかだな」
と竜が言う。
「そこは分からなかったのか？」
「はい、残念ながら。博士はその江島という男の身辺に心当たりがありそうな人物を思いつきませんか？」
「うむ、それは私も君達と同じだ。心当たりが無いな」
「そうですか…」
「まいったな、暗礁に乗り上げちまった」
甚平は困った顔をして腕を組む。
「甚平、そんな事で根を上げてどうするのよ。私達は情報屋でしょ」
とジュンが発破をかける。彼女にとって甚平は弟のような存在である。
「そんな事言ってもさあ、お姉ちゃん…」
「博士、今後も調査を続けましょうか」
「そうだな、よろしく頼む。あの江島君が急に授業を休むとはあり得ない…私もそれとなく彼の身辺を調べてみよう」
「お願いします。そういうわけだ、全員でこの暗号を誰に宛てたかを探るぞ」
「ラジャ!!」

一方、壬生国首都・静岡では…
(こ…これは…!!)
壬生国議会議員である茶渡泰虎(さどやすとらあだ名:チャド)はぎょっとした表情で紙片を拾っていた。
(間違いない…これはマヤ文字…!まさか…アブウェロ[作者註:『アブウェロ』とはスペイン語で『祖父』という意味]の言っていた事は本当だったのか…)
彼は大松百貨店という名古屋を本拠地とする店舗にある書店でホラー作家であるダニー・エルフマンのサイン会に出て、いろいろ談笑してから議員事務所のあるアパートに戻ろうとしていた時に偶然目に留まったこの紙片を拾ったのだった。その紙片は焼却しようとしていたのか、端が焦げていた。
(という事はこれは何かの暗号文書…それも何か重要な事が書かれていたに違いない…)
そこで彼は電話をかける事にした。
「もしもし、石田か。今どこにいるんだ？できればあって話がしたい」

「それで僕に相談したわけだ」
「ああ、そういう事だ」
「随分顔が青いぞ、どうして君がこの紙片の事で青ざめるんだ？」
近くの喫茶店で茶渡と落ち合った石田雨竜(壬生国法務省勤務)は彼の青ざめた顔に少し戸惑っていた。
「石田、俺がメキシコ人とのクォーターである事は前に話しただろう」
「ああ、聞いている」
「俺は小さい頃、両親を亡くしてメキシコのアブウェロ、つまり俺の祖父に預けられた。その時、祖父が話してくれたんだ。『この地にはミキストリがいる、彼等は常に世界中を移動し、闇の中で邪な人間達の命を奪っている』とな」

『ミキストリ』?それは一体…」
「本来はメキシコの民間で語られている死神の事だ。だが祖父が言うには実際にその名を語る組織があるらしい。その時俺は幼かったし、恐ろしくて詳しい事は聞かなかったが」
「何だって!?でもその組織とこの紙片とどういう関係があるんだ」
「俺もまだ半信半疑なんだが奴等はこのマヤ文字を暗号として使っているらしい」
「茶渡君!君は読めるのか!?この文字を」
「ああ、祖父がかのインディ・ジョーンズ博士のマヤ文明遺跡発掘調査に参加していたからな。俺も手伝わされたし、祖父や博士からマヤ文字を教わった事がある」
「それは初耳だ。驚いたよ、まさか君がこの文字を読めるとは…。でこの紙片に書いてある文字は何て読むんだ?」
と石田は茶渡を促すが
「すまない、この紙片には一文字しか残っていないから読めない」
「そうか、だがこの紙片の出所を知る必要があるな。どこで拾ったんだ?」
「ダニー・エルフマンって作家を知っているか?」
「ああ、あの有名なホラー小説家か、確かサイン会をやっていたな」
「俺は彼の作品が好きで参加したわけだが、その帰り道でこれを拾った」
「……」
石田は数秒間沈黙していたが
「まさかだとは思うがその作家がさっき言っていた組織と関係しているのではないか?」
と茶渡に尋ねる。
「…分からない、だがありえない話ではない」
「ならば図書館へ行こう。あの館長ならば調べてもらえる筈だ」
「そうしよう、俺もこの紙片にある真実を知りたい」
二人は喫茶店を後にして壬生国国立図書館に向かった。

「…ほほう、これはマヤ文字だね」
「ああ、これを拾った経緯は先ほど話した通りだ」
茶渡と石田は館長室で壬生国国立図書館館長、涅マユリ(くろつちまゆり)に紙片を見せて事情を説明していた。
「なるほどね、私としても大いに興味がある」
「この紙片の出所を探りたい、協力してもらえるだろうか?」
「いいとも、退屈しのぎにはちょうどいい。だがこれに関して調べるならば私よりもこの事に精通している女がいる」
「誰だ、その女?」
「考古学者だ、ニコ・ロビンという名を知っておるかね?」
「いや…」
「僕は聞き覚えがある、関東連合にある京葉大学准教授で考古学博物館館長、更にはインディ・ジョーンズ博士の弟子の一人でもある人だな」
「いかにも、彼女とは文献に関する事で知り合ってねえ。彼女ならば詳しい事が分かるだろう」
マユリはそう言うのとデジカメを取り出して紙片を写し撮るとカードを取り出してパソコンに写真のデータを移した。そしてメールを作成し、データを添付して送信する。
「これでよし、後は彼女からの連絡を待つとしよう。そうそう、この紙片を私に預けさせてくれないか」
「ああ、そうしてくれると助かる。俺達も独自に調べよう」
「よろしい、では我が娘に手伝えよう」
マユリは内線を掛ける。
「ネムはいるか…。今からカウンターに私を訪ねた者が二人来る。彼らにマヤ文字に関する文献を用意しておいてくれたまえ。私も後から行く」

一方、関東連合の京葉大学では…
「マヤ文字とは珍しいものを送ってきたわねえ」
マユリ達が話題にしていたニコ・ロビンは研究室で図書館から送信されたメールを読んでいた。そのメールにはこう書かれていた。
『久しぶりだねえ、突然ではあるが君の専門分野を見込んでこのメールに添付した物の事について調べてもらいたい。これを私のところに持ってきた者の話によれば、ある組織が暗号として使っているそうだ。ミキストリという名の組織だそうだが心当たりがあるかね?その事も踏まえて調査して欲しい。結果を待っているよ』
(『ミキストリ』…確かメキシコの死神の事だけど…)
ロビンはメールを読みながら考え込む。
(組織か…。となるとこの一件は慎重に事を進める必要があるわね…尤もジョーンズ先生も危ない橋をいくつか渡ってきたし、私も慣れっただけど…)
ロビンは一人微笑むと書棚へ行き、文献を探し始めた。

話を図書館に戻す…
「館長より頼まれた文献を用意させていただきました」
「ありがとう、後は僕達でやるから」
「分かりました、失礼致します」
マユリの娘で司書のネムに文献を用意してもらった茶渡と石田は早速文献を読み始める。
「…これでどのくらい分かると思う?」
「やってみない事には分からないがあ紙片の一文字の意味とその先の推測ぐらいだろうか」
「…見えないほど細い糸だな」
「だがあの文字には不吉な予感がする。この壬生国に関する予感が…」
「どうやらまだ始めたばかりのようだが何か手掛りは掴めたかね?」
文献を調べている二人にマユリが声を掛ける。
「ご覧の通り始めたばかりだ、何とも言えんな」
「だろうね、私とてすぐに答えなど出るわけがないと思ってるから。さて私も調べるとするか、その不吉な予感とやらを知りたくなってきた」
「まるで予感が的中して欲しいような言い方だな」
と石田はマユリに少し棘を含んだ言い方をするが

「まあね、半ば興味あるからね」
とかわされる。
…この三人の話を近い所で聞いていた者が二人いた…。
「…!!」
帽子をかぶった老人と青年が茶渡らの会話を聞いて歩く。だが二人とも彼らの話を聞いて深刻な顔をしていた。青年は返却処理の済んだ書籍を元の本棚に戻す為に偶然歩いていた。老人は顔色を変えるとすぐに図書館を出て行った。
(間違いない、話から推測すれば…!!奴等、とうとう動き出したか…)
青年はすぐに隠れると携帯電話を取り出す。だが、これが単なる携帯電話ではなく高性能スマートフォンである事を誰も知らない。そう、青年の正体はあの『ソレスタルビーイング』のメンバーの一人、アレルヤ・ハプティズムであった。彼はこの図書館にアルバイトとして潜り込み、壬生国の情報を収集すべく動き始めていた。
「コード110…」

その10分後、オーストリアでは…。
「トレーズ様、キュリオスより緊急連絡が入りました」
「レディ、ミキストリが壬生国で暗躍している可能性があるという事か…」
「はい、即座に全メンバーにMLで送りましたわ」
「さすがだ、私もかの奇跡の青年と連絡を取って動き出さねばなるまい…。レディ、至急日本への渡航準備を進めよ」
「ハハッ!」
厳しい表情でトレーズ・クシュリナーダは空を眺めていた。
——ミキストリ…、お前達の思うつぼにはさせやしない…!

「何、それは本当の事か!?!」
「シャルル、ワシも驚いてこれはすぐにお前さんに伝えねばならないと思って急いで戻って来たのじゃ!!」
「ミキストリが暗躍すると言う事は、間違いなく壬生国は混乱必至だ…。ヘンリー、こうなった以上私はシュナイゼルと共にルルーシュとの和解を急がねばなるまい…」
図書館から戻ってきたのはヘンリー・ジョーンズである。彼はオーブ王立大学名誉教授で、あのインディ・ジョーンズの父親であった。なぜシャルルと普通に話せるかという彼はシャルルの親友だったからだ。オーブを訪問していたシャルルに連絡を取るべきとヘンリーは判断した。因みに彼はこの壬生国に講演会で来ていて、その合間に図書館に来ていた時に石田達の話を持ち聞きたのだった。
「お前さん、国王陛下とお会いされるじやろう」
「ああ、この事は話しておこう。私もうかうかできなくなった」
電話を切ったシャルルは厳しい表情になった。
——あの時私の取った対応が大きな禍根を招くとは…。済まない、兄上よ、マリアンヌよ…!!
シャルルはルルーシュに隠れて独自にテロ事件の真相を調べてもらっていた。その中で浮かび上がったのはユーロ議会を巡る主導権争いだった。だがいまいち証拠が見えてこない。そうしている内に今回の騒動だ。
——急がねばなるまい…!!
だが、その焦りが大きな禍根を招く事をシャルルは身を以て思い知る事になろうとは思ひもなかった…!!そして石田、茶渡、マユリ、ロビン、ヘンリー、それに南部と『ガッチャマン』の面々は知る由もなかった。彼らが調べようとしている江島とエルフマン(コードネーム: マヤ)が『ミキストリ』の一員であり、彼らのターゲットが喪黒福造であった事を…。
そしてその頃、関東連合ではあのジウザに最大の危機が訪れていた…。

編集者あとがき

我々がつくる実社会には完全なるものはありません。
今回の話は今まで『新生活日記』で掲載されてきたものをまとめて再編集したものです。どの時代でも利益ばかりに目がくらむのは常です。そして公害などの歪みは後回しという結果、実社会に大きなつげが襲いかかる有様です。そうした状況を諦めて傍観した事もこの悪行を長引かせる一因だということを我々は認識すべきなのです。ジウザを襲った危機とは何か、それと『ミキストリ』の影に関わった者達はどうなるのか、今後の展開にご注目!

著作権者 明示

『インディ・ジョーンズ』シリーズ: (C) スティーブン・スピルバーグ、ジョージ・ルーカス 製作: ルーカスフィルム 1981・1984・1989・2008
『交響詩篇エウレカセブン』: (C) BONES/毎日放送 2005
『ミキストリ-太陽の死神-』: (C) 巻来功士 1990
『魔探偵ロキ RAGNAROK』原作: 木下さくら (C) スタジオディーン/テレビ東京 2002
『トライガン』: (C) 内藤泰弘 マッドハウス 1995・1997・1998
『アキハバラ@DEEP』: (C) 石田衣良・文藝春秋 2002
『浅見光彦』シリーズ: (C) 内田康夫 1982
『あぶさん』: (C) 水島新司 1973
『エスパ―魔美』: (C) 藤子・F・不二雄/テレビ朝日・ADK・シンエイ動画 1977・1987
『怪盗セイントテール』原作: 立川恵 (C) 朝日放送・電通・トムスエンタテインメント 1994・1995
『スターウォーズ』シリーズ 監督・総指揮: ジョージ・ルーカス 配給: 20世紀フォックス 1977・1980・1983・1999・2002・2005
『だんだん』: (C) NHK 2008
『美少女戦士セーラームーン』: (C) 武内直子・講談社 1991
『超星神グランセイザー』: (C) 東宝 2003
『トライガン』: (C) 内藤泰弘・マッドハウス 1995・1997・1998
『ワイルドハーフ』: (C) 浅美裕子・集英社 1996
『ウルトラマンネクサス』: (C) 円谷プロダクション 2004
『仮面ライダーBLACK』: (C) 石ノ森章太郎・東映 1987
『金田一少年の事件簿』: (C) 天樹征丸・さとうふみや・金成陽三郎・講談社 1992
『名探偵コナン』: (C) 青山剛昌 小学館 1994
『スーパードクターK』: (C) 真船一雄 講談社 1988
『MR. BRAIN』: (C) TBS 2009

『北斗の拳』:(C)武論尊・原哲夫/NSP 1983
『蒼天の拳』:(C)武論尊・原哲夫/NSP 2001・蒼天制作委員会
『交響詩篇エウレカセブン』:(C)BONES/毎日放送 2005
『ダヴィンチ・コード』:(C)ダン・ブラウン 2003
『マクロス7』(C)ビックウエスト・葦プロダクション・毎日放送 1994
『BLEACH』(C)久保帯人/studio ぴえろ・テレビ東京・dentsu・集英社 2001
『FINAL FANTASY 7』製作:スクウェアエニックス 1997
『傷だらけの仁清』:(C)猿渡哲也・集英社
『コードギアス 反逆のルルーシュ』:(C)サンライズ・コードギアス製作委員会 2006
『機動戦士ガンダム』シリーズ:(C)サンライズ・創通 1986・1995・1996・2002・2004・2007
『笑わせえるすまん』:(C)藤子不二雄A 1990
『スーパー戦隊』シリーズ:(C)東映 1986・1988・2002・2003・2006・2007
『美味しんぼ』:(C)雁屋哲・花咲アキラ・小学館 1983
『ミスター味っ子』:(C)寺沢大介・講談社 1986
『空想科学世界ガリバーボーイ』:(C)広井王子・フジテレビ・東映映画・ゲーム製作 ハドソン 1995
『レミーのおいしいレストラン』:監督 ブラッド・バードヤン・ピンカヴァ 配給 ウォルト・ディズニー・スタジオ 2007
『将太の寿司』:(C)寺沢大介・講談社 1992
『ONE PIECE』:(C)尾田栄一郎・集英社 1999
『白い巨塔』:(C)山崎豊子 1963
『科学忍者隊ガッチャマン』(C)吉田竜夫・タツノコプロ 1972

ここでひとつ、前回追加しそこねた作品名を掲示します。真実の礎 10 話まとめ 5 章に相当する箇所です。お詫び申し上げます。
『真実の礎』第 22.5 話:東と北から来た死神